ＩＳ～女オリ主と弾の恋模様

シリカ@雫推し

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主と弾の甘酸っぱい恋物語

処女作

ゆっくり投稿

そこまで期待しないでね

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 5
第3話 …… 10
第4話 前編 …… 16
第4話 後編 …… 21
第5話 …… 27
第6話 …… 34
第7話 …… 41
第8話 …… 44
第9話 …… 48
第10話 …… 52
第11話 …… 57
第12話 …… 67
第13話 …… 71
第14話 …… 77
第15話 …… 80
第16話 …… 86
第17話 …… 90
第18話 …… 94
第19話 …… 97
第20話 番外編 …… 103
第21話 …… 108
第22話 …… 111
第23話 …… 115
第24話 …… 119

第28話 134
第27話 128
第26話 125
第25話 122

第1話

私の名前は栗原美樹、この春から中学1年生です。
ドキドキしながら真新しいセーラー服を身に纏って入学式を終え、自分のクラスに入り自分の座席に座りクラスメイトを観察していた。
すると隣と後ろの席の男子から声を掛けられた
「よう　俺の名前は織斑一夏、よろしくな!」
「俺は五反田弾、よろしく!」
「私の名前は栗原美樹、よろしくね。」
お互い挨拶を交わしたのだが、周りが煩いのは気のせいよね?・・・
今日はＬＨＲの時間を使って自己紹介と学校案内を行うようだ。
自己紹介を終え学校案内の時間になり、何となく3人で回るのかな～って思っていると
「一夏～、行くわよ～」

と言う声と共に織斑君に抱き付く女の子がいた。
『確か、凰鈴音（ファンリンイン）さんだったかな』と思ってると、ちょっと睨むような目つきで
「あんた、誰？」
と聞かれた。
ちょっとビクッとしたもののお互い自己紹介をして４人で回ることとなった。けど、凰さん？じーーっと胸を見るのはやめてほしいな・・・

５月にもなると４人とも下の名前で呼び合うようになり、休みの日は４人で遊ぶようにもなった。
ＧＷは弾と鈴の家が食堂ということもあり、旅行に行くこともなかったために４人で遊ぶ計画をたてた。
とはいっても、お小遣いも少ない中学生に遠出できるはずもなく、誰かの家でゲームするなりレゾナンスにショッピングにでかけるくらいしかできない。
となると誰の家で遊ぶかということで悩んでいると一夏から

「俺の家なら誰もいないし、ウチで遊ぶか？」
　との提案があった。
　私たちはその提案にのったが、私だけなのかな、疑問に思ったことを一夏に聞いた。
「ねぇ、一夏のご両親は？」
　聞いた瞬間に弾と鈴の表情がちょっとだけ曇ったようになり悟った・・『あっ、地雷踏んじゃった』
「ウチは両親がいなくてな、千冬姉と二人暮らしなんだ」
　と一夏は教えてくれた。
　知らなかったとは言え、悪いこと聞いちゃったな　と思い一夏に
「ゴメン」
　と謝罪をした。
「いいって、気にすんなよ。今の生活も悪くないんだから」
　と言ってくれた一夏に弾が、
「だよな～。一夏はシスコンだし姉ちゃんと一緒で嬉しいもんな～」
「うるせー！ぶっとばすぞ!!」
　へ～、と思いながらニヤニヤしながら弾に『ありがと♪』と心の中で感謝した。
　そこで、ふと疑問に思ったことを聞いた。

「ねえ、一夏のお姉さんってあのブリュンヒルデの織斑千冬さんなの？」
「ああ、そうだよ。知らなかったっけ？」
「ええええええええ!!!」
　一夏の返事に思わず大声を出してしまった。
「ど、どうしたんだ？」
「だって私、千冬さんのファンだもん♡」
「あら、美樹ってミーハーなのね♪」
「リ～～ン～～～!!!」
「「あはははは」」
「笑うな～～～／／／」

第２話

ＧＷ初日
今日は朝から一夏の家でゲーム三昧の予定です。
４人で遊べるゲームは少ないけどあるんだけど、ボ○ビーが出てくるやつとか・・・
うん、リアルで喧嘩になりそうだからアレはやめましょうか
ん～っと、何か良いゲームが無いかな～
あっ！　ＩＳのゲームがある！
これが良いな♪
「ね～！これにしよ～♪」
「「あはははは　やっぱりそうか！」」
「う～る～さ～い～（プンプン）」

あれからお昼前までゲームしてたよ？
４人総当たりで
１位が鈴

２位が私
３位が一夏
４位が弾でした。
ただ、一夏と弾は私と鈴に手加減してたっぽい？
２人とも、ありがと／／／
それにしても、なんたかんだ皆で盛り上がれるＩＳは偉大だね♪

お昼になって一夏が前もって用意してたご飯をだしてくれた。
「えっ！一夏、料理できたの?!　スゴイ・・」
「ああ、千冬姉はいつも家にいないからな。帰ってきた時に美味しいもの食べてもらいたいじゃん！」
「「出たｗｗ　シスコン発言ｗｗ」」
「そんなこと言うヤツらは食わんでよろしい！」
「「ゴメンなさい。ご飯食べたいです・・・」」
「よろしい！」

食事中に判明したが、一夏の料理はすごく美味しい！私のお母さんより美味しいかも

しれない。
『これは是非とも嫁にしたいな!』そう思ってると鈴からの視線が痛いです・・・

食事を終え、後片付けは私と鈴に任せてもらえることになり、鈴と色々なことを話した。
まぁ主に鈴が一夏を好きだということだったけどね。
だと思ったよ。
『応援するから頑張ってね♪』
そして私と鈴でお互いの恋を応援する【乙女同盟】なる約束を結んだ。

午後からはゆっくりとお喋りをすることになった。
最近面白かったドラマやお笑い番組、映画の話で盛り上がり、ふとした時に鈴が私の初恋を聞きたいと言い出した。
鈴と2人だけの時ならまだしも、男子2人にまで聞かせたくなかったので
「じゃあ鈴はいつなの?」
と聞き返したら

「わわわ、私のことはいいじゃない／／／　　一夏はどうなの?!」
「ん?俺はまだないな～」
と一夏は言った。
まぁ一夏は女子に「付き合って下さい」と告白されて「おう　いいぜ!買い物だろ?荷物持ちくらい付き合うぜ」と言う唐変木なのだ。
初恋もまだなんじゃないかな～と想像はついていた。
となると残るは弾1人。
私と鈴は「キリキリ吐けや!」などと副音声が聞こえそうなキラキラした目で弾を見つめた。
弾は諦めたのか思い出すように話だした。
「確か5歳の時だったと思うけど、蘭と○○町にある公園に遊びに行った時に1人の女の子が泣いていたんだ。知らない子だったけど、心配になって声をかけたら大事なものを無くしたらしくて泣いていたみたいだったから蘭と一緒に探してあげたんだ。しばらく探してたら、それっぽいのが見つかって「君の探してたものはこれか?」って聞いたら「うん!これだよ。2人ともありがとう」って笑顔で言われてな、多分その子が俺の初恋だと思う」
私はドキッとした。

一夏と鈴が「名前は聞いたのか？」「どんな子なんよ？」と聞いているが、私の頭の中には当時のことが鮮明に思い出されていた。

確かあの時は、誕生日に買ってもらったブローチを付けて遊びに行ったんだったかな。遊ぶのに夢中になって無くなったことに気付いてなかったっけ。帰ろうとしたときに無くした事に気付いて困ってたときに助けてくれたあの子が弾だったんだね。

ふと前を見ると弾はまだ２人に揶揄われていたので

「いい思い出だね♪」

と弾に言うと２人も

「「そうだな（ね）」」

私たちにそう言われた弾は少し照れているように見えた。

この後、お開きになって解散したちょっと後に鈴に呼び止められ

「弾の初恋の人って美樹でしょ？」

とニヤニヤしながら言われた・・・

バレたか・・・／／／

第3話

ＧＷ２日目

今日は弾の家で麻雀をすることになった。

３人に麻雀をやったことあるのか聞かれたから

「大丈夫！カイジと咲は読んだことあるよ！」

と答えたらジト目で見られたよ・・・

と言うか、カイジって麻雀要素あったかな？

３人からルールを教わりながらやってみたものの、役がどうとか全くわからない・・・

ついでに昨日は夜遅くまで起きてたから寝不足で難しいことは勘弁してほしいというのが本音だ。

途中から弾の妹の蘭ちゃんが来たから変わってもらって、鈴を後ろから抱きしめたり、ベットの上から観戦することにした。

麻雀でも鈴は強かったが、後から聞いたら鈴はゲームでも麻雀でも勝てないと拗ねる

そうだ。『カワイイな～　鈴は』

お昼前になり、弾の祖父である厳さんがご飯を用意してくれるとのことで、1階の食堂に向かった。

席に着くとカボチャ煮定食が出された。

「「「いただきま～す」」」

何これ！甘くて美味しい♪

ウチの母もこれくらい美味しく作ってくれたら・・・　と完全に人任せな感想を思った。

食べ終えた頃に厳さんが

「そういや一夏よ、今年も千冬の嬢ちゃんはモンドグロッソに出るのか？」

と一夏に聞いていた。一夏は

「はい！8月の予定なので、そろそろ訓練も厳しくなるそうでなかなか帰って来れないみたいです」

「終わったら優勝パーティー開くから連れてきな」

と言い、食器を下げてくれた。

いっぱいになったお腹をクールダウンさせるために、一旦弾の部屋に戻り午後の予定を決めることにした。
レゾナンスは明日の予定なので遠出はできない。
1時間程考えても良い案が出なかったので、散歩でもしよっか　ってなことになった。

ポカポカ陽気の中散歩というのも中々気持ちがいいな～。
小一時間程歩いているとベンチが見えたので、軽く休憩にした。
そういえば、お昼のモンドグロッソの話題で気になった事について一夏に聞いてみたいことがあったので聞いてみた。
「ねぇ　今年のモンドグロッソってドイツだよね？　一夏は行くの？」
「あぁ、千冬姉の応援に行かないとな！」
一夏の言葉に
「生でモンドグロッソを見れるのはうらやましいな～」
「頑張れよ～」
「お土産のバームクーヘンよろしく～」

と三者三様の答えを返していた。
弾さんや？　観戦でどう頑張れと？・・・

あ～、日差しが気持ちいいな～
と思ってると一夏がいきなり
「鈴！俺、鈴が好きだ！付き合ってくれ！」
と告白した。
いきなり?!と思いつつも、ニヤニヤしながら鈴を見ると顔を真っ赤にしながら
「う、うん！　よろしくお願いします／／／」
「よかったね～」
と言いながら、真っ赤になった鈴が可愛くて思わず抱きついてしまった。
今度は弾が
「美樹が好きだ！付き合ってくれ！」
えええええ!?
弾が私を・・・　そうなんだ／／／
『はい／／／』
そう言おうとすると遠くから

（美樹、美樹）
どこからか私を呼ぶ声がしたので周りを見ても誰もいない。
あれ？一夏や弾、鈴の姿も見えない。
（美樹、美樹）
私を呼ぶ声がだんだんと近くなってきた。
すると
「やっと起きたか～」
「弾に肩借りてたんだから、ちゃんとお礼言っておきなさいよ」
「ふぇ？・・・・・・・・」
周囲を見渡すと空が薄暗くなっているのがわかった。
「私・・　寝てた？・・・・」
「ずいぶん気持ちよさそうに寝てたから起こせなかったけど、そろそろ寒くなってくるから起こさないとまずいかなって」
一夏に言われて恥ずかしかったけど、さらにニヤニヤした鈴から追い討ちをかけられた。
「それで、いつまで弾の肩借りてるの？」
えっ・・・

そこで自分の体勢に違和感を感じることができた。
一夏と鈴が斜めに見える。
隣を見ると弾が苦笑いを浮かべながら
「やっと起きたか、寝坊助さん（笑）」
「弾　ご、ごめんね・・・」
「いいって、いいって。そらよりヨダレ拭かないとみっともないぞ」
と言いながら弾はハンカチをくれた。
はぁ、みっともない所をみせちゃったな・・・

第４話　前編

ＧＷ３日目（最終日）
休み前に計画した通り、レゾナンスの前で待ち合わせしていた。
計画も最終日にレゾナンスに行く、と言うことしか決まっていなかったからね。

１０時の予定だったけど、昨日のこともありちょっと早目に家を出たので２０分前に着いてしまった。
５分後に一夏が到着しお互いに挨拶をすませ、今日は何をしようかと軽く相談した。
しばらくすると鈴が来て挨拶をすませると、一夏がトイレに行った。
鈴とおしゃべりしていると、２人組の男達が近づいてきて
「お２人さん、ヒマなら俺たちと遊ばない？」
と声をかけてきた。
「いえ、友達と待ち合わせをしてるので」
とこたえると、
「じゃぁさ、その友達も一緒に遊ぼうよ～」

と言ってきたので、どうこたえようか迷ってると

「あんたたち、不細工のくせして私たちが迷惑してんのわかんないの？そんなこともわかんないようならさっさとどこかへ行きなさいよね」

「なんだと！テメー！」

鈴の口撃に怒った男たちは鈴に殴りかかろうとしてきた。私は咄嗟のことで驚きつつも鈴を守るために鈴に覆いかぶさるように抱きしめることしかできなかった。その時

「イテテテ！離せよ！」

「何なんだよ！テメーら」

振り向くと一夏と弾が男たちの腕を締め上げていた。

「俺らのツレが失礼なこと言って申し訳ないけど、殴りかかるのはないんじゃないかな？」

「ここは俺らに免じて許してやってよ」

と言うと、男たちはそそくさと逃げていったようだ。

私たちは2人にお礼を言った。

案の定、鈴は2人からお説教されたものの、鈴の性格を熟知してるからか小言で済んだようだった。

さて、どこから行く？

この問いに４人の行きたい先は、洋服屋、雑貨屋、ゲームセンター、キッチン用品売り場と見事にバラバラだった。

買う買わないは別として、荷物の事を考えるとゲームセンター、雑貨屋、洋服屋、キッチン用品売り場の順で回るのが妥当かな？

ゲームセンターに着くなり弾は一夏にエアホッケーの勝負を挑んだ。それならと４人で勝負することになり、一夏と弾、私と鈴でグーチーで分かれた。

結果、私と一夏　ｖｓ　弾と鈴になった。

何というか、このペア、結構釣り合いが取れているように思えた。一夏と鈴は強いが私と弾は弱かった。（弾は私と比べるとかなり強いけどね）

勝負は私と一夏ペアの勝ち！

嬉しくて一夏とハイタッチ♪

まだまだ時間もあるし今度は男子ペア　ｖｓ　女子ペアで対戦するときになった。

一夏の絶妙な手加減のお陰もあり、見事女子ペアの勝ちで幕をおろした。

他にも格闘ゲーム、クレーンゲーム、ワニワニパニックをして最後にプリクラを撮った。

プリクラは3筐体ほど変え、最後は手をYの字にして目を大きくしたりしながら落書きをした。

お昼になり、渋る一夏を宥めながらMのマークのファーストフードで食事をとった。

そして、次に雑貨屋に入り小物を見て回る。

最近買ってもらったアロマスティクディフューザーがリラックス効果や良い睡眠効果をもたらしてくれている。

何本か選んだ中で気に入ったオイルを買ったら鈴も興味を持ったようだ。

なのでプラント型のポットにオイルを入れるタイプの物を勧めてみた。

そういえば一夏が『千冬さんは帰れないほど忙しい』って言っていたのを思い出して、お姉さん用に一夏にも勧めてみた。

一夏は思っていた以上に興味を持ってくれたようで、私よりも良い物を買っていた。

むぅぅ、ブルジョワめ・・・

(後日、千冬さんもだいぶハマったようで後輩の代表候補生たちにも勧めたらしく、大好評だったようで、一夏と千冬さんにお礼を言われた♪)

雑貨屋を後にして洋服屋を回った。
お小遣いの少ない中学生とは言え、女子２人はお小遣いの前借りとお手伝い賃として余分にもらっていたので、なんとか気に入った洋服だけは買うことができた。
一夏や弾のために長くならないようにしなきゃな～、と気を付けようとしてたけど、鈴の即断即決にはビックリした。
最後にキッチン用品売り場に向かい、テフロン加工された鍋を見ている一夏を、ショーウィンドウの前でトランペットを眺める少年と比喩した私は悪くない！はず・・・
その後一夏は１０年はサビないというセラチタン製の包丁を買ったようだ。
その後、４人はレゾナンスを出て近くにある大きめの公園へ向かった。

第４話　後編

レゾナンスを出て近くの公園。
この時期のこの場所はデートスポットとして人気だけど、１７時にもなると人数は少なくなってきた。
２０時以降になるとライトアップされるから、また増えるんだけどね。

鈴はいつものように一夏に引っ付きながら歩いているので、必然的に私は弾といることになる。（嬉しいけど♪）
少ないとはいえ何組かカップルがいて、弾が羨ましそうに周りを見てるので、悪戯心で腕を組んでみることにしよう。
「ホオアォ!?」
素っ頓狂な声を出しながらビックリしてくれたようだ。もう一芝居うってみようか。
顔を赤くしながら
「ねぇ弾、どうしたの?」
「マジでやめてくれよ。心臓に悪い・・・」

ふふふ。
「男ならエスコートしてよ。それに、ここだと周りから浮いちゃうよ？」
「はぁ、わかったよ」
勝った♪
「ただ、一つ言わせてくれ」
「何？」
「それ、当たってるぞ・・・」
それ？　ああ、
「当ててんのよ！」
「俺で遊ぶな！」
はいはい。
あ、クレープ屋さんだ！
「ほら、クレープ屋さんに行くよ～」
「ったく・・」

クレープ屋さんの前に着いたが、もう閉店の準備をしていたが余ってる材料でなら作ってくれるようだ。余ってる材料で何が作れるのかを聞いたら、イチゴとブルーベ

リーのみのようだ。

そのままイチゴとブルーベリーを注文した。弾は「払うよ」といってくれたが昨日のお詫びと今日のお礼だから、と言うと引いてくれたので私が料金を支払いクレープを受け取った。

「弾はイチゴとブルーベリーどっちがいい？」

「ブルーベリーかな」

ブルーベリーのクレープを弾に渡してベンチに座る。

イチゴのクレープは、しっとりしていて個人的に好みの味だった。

ふと横を見ると弾も美味しそうに食べいた。

「ねぇ、弾」

ん？

「一口ちょ～だい♪」

パクッ！

「あああ・・・」

お！これも美味しい

「ごめんごめん。はい、これ一口食べていいから」
そう言うと、弾は確かに一口食べた。
しかし、さすが男の子。ガッツリ食べられたｏｒｚ
仕返しだあああああ!!
周りに人がいないことを確認して、耳元で
「関節キスだね♪」
そう言うと、ブフォー！という擬音と共にクレープを少し吹き出した。
おお！思った通りの展開だ。
さすが弾！略して『さす弾』
「こんなこと、誰にでもやってるのか？」
「するわけないでしょ。弾だからできるんだよ。」
なんだかよく分かってなさそうな弾にちょっとだけ呆れつつも
「弾の初恋の子って○○公園にいた子なんだよね？」
「ああ」
「実は、その子は私。そして私の初恋も同じ時。つまり弾は私の初恋の相手なのよ」
そう言い、弾の方を見るとポカーンとした顔になっていた。
「あの時助けてくれてありがとう。再開してまだ１ヶ月だけど、あの時のまま優しい人

だって知ったの。弾・・・大好きです」

弾を見ると髪をクシャクシャしながらも、優しく私を見てくれた。そして

「俺は優しくないよ・・・。実は、知ってたんだ。美樹が初恋の人だって。まぁ直感だったけどな。だから美樹に、美樹だけには誠実でいたかっただけだ。こんな俺でもいいのか?」

「弾がいい。弾じゃなきゃダメだよ。あ、でも鈴は私の親友なんだから鈴にも優しくしないとダメだよ?」

弾は照れながら「わかったよ」といいながら、顔を近づけてきた。

私と弾の唇が触れ合った。

「クラスの女子たちがファーストキスはレモンの味とかイチゴの味って言ってたけど、私たちにとってはイチゴとブルーベリーだからミックスベリー味かな?」

さて、一夏と鈴を見つけて帰ろうか。

歩き出す前に、弾は私と手を繋いでくれた。

2人を見つけるまでの間、弾の温もりをずっと感じていたい。そう思うようになっていた。

後日談

クラスの女子たちがレゾナンス近くの公園で『いつも売り切れのミックスベリーをカップルで食べることができると、幸せになれる』という話をしていたのを聞いて、悶え死にそうになりました。

第5話

ＧＷが終わり教室に入ると、普段と変わらない日常。
ＨＲまでまだ時間もある中で、私と弾の距離は今までよりも少し遠く感じる。
もちろん喧嘩をしたわけではない。ただ、お互い気恥ずかしくて距離のとりかたを測れないでいるだけなのだった。
そのことに気づいているのは鈴だけで、一夏は気づいてないようだ。

しばらくして担任が来てＨＲの時間になった。
「みんなおはよう。ＧＷはいっぱい遊べたか？次の長い休みは夏休みだから、夏休みまでに中間、期末テストがあるからしっかり勉強するようにな」
テストか～　と思っていると、
「あと今週の土曜日にＩＳの適性検査があるから土曜は授業が終わると女子は残ってくれ。その際は体操服着用だから忘れるなよ。着替えは教室ですることになるから男子はすぐ、」
すると数人の男子が

「先生俺も受けたいで～す」
「俺も俺も～」
「そうか。ならお前たちは女子に性転換しなきゃな」
皆、冗談で言っている事が分かっているので笑い声が起きた。

昼休みになり、４人でお弁当を食べていると鈴が
「適性検査ってどんなことするんだろうね」
と聞いてきた。
「正直何をするかわかんないけど、女子生徒全員を検査するって時間かかりそうだよね」
「だよね～」
と肩を落とした。
土曜日は男子２人は先に帰り、終わったら合流することにした。

土曜日になり、検査当日
授業を終え、女子生徒全員が体育館に集められた。
体育館に入ると、みんな驚愕していた。
それはそうだろう、なんといっても日本の量産機「打鉄」が３体もあったのだ。

生徒全員が学年、クラスごとに並ばされ、白衣を着た検査員から説明を受けた。
「皆さんには学年ごとにＩＳを触っていただきます。起動できた生徒さんは舞台側に集まっていたたきます。起動できなかった生徒さんは帰っていただいても大丈夫です。ただし友達を待つ場合は体育館の外でお待ちください。そして起動できた生徒さんには全員の検査が終了次第、説明をさせていただきます。何が質問はありませんか？」
「では質問がないようなので、検査に入ります。皆さん、先生方の指示に従って下さい」
各学年主任が一組から出席番号順に並ばせ、検査場に案内した。
私の番まで時間があるので舞台の方を見てみると、各学年２．３人しかいないようだ。

１０分後、私の番になり打鉄を触った。
すると『キンッ！』と金属音が頭に響いた。
そしておびただしい情報が頭の中に入ってきた。
ふと手を離すと、検査員の人から
「おめでとうございます。舞台の側でお待ち下さい」
後ろからら　オォー！　という声が聞こえ、なんだか気恥ずかしくなり、そそくさと舞台の方へ向かった。

その直後また歓声が上がり、見てみると鈴も起動したようだ。
鈴が走って来たので「おめでとう」と言うと「当然でしょ！」とドヤ顔で言うので、頭を撫でておいた。
鈴を含めて起動できた１年生数名と「この後、どんなことするのかな？」と話していると、全員の検査が終わったようだ。
最初に説明をしていた検査員さんが来て、クラスや出席番号は気にしないので各学年で一列に並ぶように言われた。
弾たちの事を待たせてるし前に並びたかったが、遅かったようで仕方なく鈴と後ろにならんだ。
並び終えると検査員さんに、これからの説明を受けた。
「これから皆さんには実際にＩＳに乗っていただきます。ただし乗るだけなので動かす事は出来ません。皆さんが乗っている間に横にある機械で適性ランクを調べさせていただきます。このランクは個人情報に当たります。皆さんが友達に言うのは問題ありませんが、自己責任になりますので気をつけてくださいね。何が質問はありますか？」
説明を聞いた生徒が一人手を上げた。
「適性ランクの詳しい説明をしていただいてもよろしいですか？」
あ、私も気になるなぁ。

検査員さんが答えてくれた。
「適性ランクにはＳＡＢＣＤがあり、５段ピラミッドで上から順にＳＡＢＣＤとなります。ピラミッドのようにＤランクの人が一番多くて、逆にＳランクの人が一番少ないですね。そしてランクが高いほどＩＳとの親和性が高く、操縦がしやすいとされています。ちなみにＢ以上の人はＩＳ学園への受験も可能ですよ。これで分かってもらえましたか？」
「はい。ありがとうございます」
「他に質問はありませんか？　ないようなので検査に入りますね。では先程触れていただいたＩＳの周辺に集まってもらい、名前を呼ばれたらＩＳに乗っていただきます。皆さん移動して下さい」

そして触れたＩＳの周辺に行き、名前が呼ばれるのを待った。
ついに私の番になり、ドキドキしながらＩＳに乗った。
検査終了直後に検査員の方が小声で「えっ！」と言ったのが聞こえた。
壊しちゃったのかと心配していたが、検査員の方から結果表をもらい、「Ａ　＋とはすごいですね。おめでとうございます」と言われた。
結果表を見ると確かにＡ　＋と書かれていた。

ランクはＳからＤの五段階しかないんじゃないのかな?と思ったが結果が出ている以上、何も言えないでいた。
次は鈴の番かな～　と見ていると、
「おおとりすずねさ～ん」
と呼んでいた。
それを聞いて『あぁ、確かに知らない人が読めばそうなっちゃうか～』と思っていた。
呼ばれた鈴は
「私は、ファン　リンインです。」
と言った。
するとザワザワとした空気になり、検査員は鈴に
「国籍は日本ですか?」
「いえ、中国ですけど」
と鈴が答えると余計にザワザワしだした。
検査員は携帯電話を取り出し、どこかへ電話をしていた。
『えっ?えっ?』と戸惑っている鈴に私は近づき「大丈夫だよ」と励ました。
そして最初に説明をしていた検査員が近くに来たので、どういうかとか聞いてみた。
すると

「他の国の人に対して適性検査をすることはアラスカ条約に違反するんだ」
　それを聞いた私は頭にハテナのマークが浮かんだ。よく分かっていない私に説明を続けてくれた。
「例えば君が他の国で検査をして今の結果を出した。Ａ　＋なんて結果を出したんだから、その国は躍起になって君だけでなく、君の家族をもその国に勧誘するだろう。つまり、他国の人に迷惑をかけないように条約で決まっているんだ」
「じゃぁ、鈴は日本では検査は出来ないんですか？」
「ええ、申し訳ないけどそうですね」
　納得はしたけど、何とも言えないまま私と鈴は教室へと向かった。

　余談だが鈴の検査についてランク検査をしていないということで検査員達に罰則はなかったが厳重注意を受けた。

第６話

適性検査から2日後の月曜日のＨＲ前にクラスメイトの女子達から土曜のことについて色々と聞かれたので、起動したことやランクを調べたということを教えた。

あと鈴のことを軽く説明して、この話題をしないようにお願いした。

放課後、弾と鈴は家の手伝いをすることになっているので、授業が終わるとすぐに帰えらなければいけないので、いつも４人で途中まで帰ることにしている。

検査の後、鈴は落ち込んでいたが、土日に3人で頑張って機嫌をとって、ようやく機嫌を直した。

家に帰ると宿題と来月の中間テストに向けて勉強を始めた。特に難しいことはなかったが、英語だけは苦手なので苦労していた。

晩ご飯を食べ終え、勉強しようとした時に電話が鳴った。電話に出るとＩＳ委員の人からだった。

話の内容は代表候補生にならないか、ということだった。パンフレットと説明会の紙を送るから家族と相談してね。

という事だった。
ちょうど両親が同じ部屋にいるので今のうちに聞いてみた。
「お父さん、お母さん相談があるんだけど、今いいかな?」
「どうした?」
「あのね、私、ＩＳの代表候補生になりたいの」
両親は「え!?」という顔をしながら
「代表候補生ってなりたくてもなれるものじゃないだろう」
「そうよ、代表候補生なんて才能のある人しかなれないのよ」
両親、特に母の言い方に若干怒りを覚えつつも土曜日に行われた検査の結果表を２人に見せ、さっきの電話もＩＳ委員の人からでスカウトされた事を伝えると「やってみたらいいんじゃないか」と言うことになり、後日、説明会の紙などが送られてくることを伝えて部屋に戻った。

翌日、お昼にお弁当を食べていると一夏が
「今千冬姉が帰ってきてるんだけど、お土産みたいな感じでお菓子とか大量にもらったらしいんだ。放課後よかったら持っていってくれ」
と言ってくれた。お菓子に釣られて私と鈴は必ず行くであろう。

そこでふと気になったことを一夏に聞いてみた。
「千冬さんって放課後になっても家にいるの？」
「今日と明日は休みだって言ってたからいると思うぞ。」
と教えてくれた。
「サインもらったらダメかな!?写真は?!」
その言葉に一夏は若干引きつつも
「聞いてみないとわかんないけど、多分してくれるんじゃないかな」
と言ってくれた。放課後が楽しみだぁ。

放課後、文房具屋で色紙とサインペンを購入した。そのまま一夏の家へ向かう予定だったが、一夏からのお願いもあって一度家へ帰り着替えてから行くことになった。
一夏の家に到着しインターホンを鳴らすと、すぐに一夏が出迎えてくれた。
すでに鈴と弾も着いているみたいだ。
リビングに向かうと一憧れの千冬さんに出迎えられ、顔が真っ赤になった。
私は自己紹介をして、しっかりとサインをもらい、図々しいのは理解しているが一緒に写真も撮ってもらった。
例のお菓子は別の部屋に保管してあるようで一夏と千冬さんが取りに向かった。し

ばらくして一夏と千冬さんが大量の袋を持ってきた。まだまだあるようで3人とも驚いた。

適当に好きなものを袋に詰め終わると、千冬さんから私と話があると言われ、一夏、弾、鈴を一夏の部屋に行くよう促した。

千冬さんにリビングの椅子に座るように言われ、座って待っているとクッキーとお茶を用意してくれた。そして千冬さんに

「栗原美樹だったな。まずはアロマを一夏に私に勧めるように言ってくれたらしいな。思った以上に良かったから、他のやつらにも勧めたら大好評だった。皆の分も含めて感謝する」

「いえ、皆さんのお役に立ててよかったです」

「ここから本題だが、栗原は代表候補生になるのか?」

と聞かれ、この時、親も含めて初めて自分の夢を話した。

「私の夢は宇宙へ行くことと、モンドグロッソで優勝することです。なので今回の話はチャンスとして受けたいと思っています」

「そうか。それなら今からでも身体を鍛えた方がいいな。候補生の前に訓練生として、まず簡単な使い方や法令などを座学の勉強から始める。そして、試験に合格した者が候補生になる。まぁ訓練生は2ヶ月程度だが、それでも鍛えるなら早い方が良いからな。

土日も訓練になるから学校の勉強も大変だろうが、頑張れ」
「あ、ありがとうございます！」
　お礼を言い、一夏の部屋へ行こうとしたが、誰かに相談しようと思っていたことを話してみた。
「千冬さん、相談があるんですが良いですか？」
「私に出来ることだったらな」
「実は最近、弾と付き合い始めたのですが、お互い照れがあるのか今までよりちょっと距離が遠くなったように感じるんです。こんなとき、どうしたらいいでしょうか？」
　今まで恋愛をしたことのない千冬は、この相談に対して最適な答えを見つけられないでいたが、プライドなのか見栄なのかよくわからないが、それっぽい答えが浮かんだ。
「友達から恋人になると、距離が遠く感じることはよくあることだ。それは時間が解決してくれる。ただ、時間をかけ過ぎると別れる原因にもなるからな。お互いよく話し合い、ちょうどいい距離感を見つけることが重要だと思うぞ」
「なるほど。私、時間をかけてゆっくりと解決していこうとしてたのですが、それじゃぁダメだったんですね。確かに相手がいないと恋愛はでないし、恋愛は一方通行じゃ続かないですもんね。ありがとうございます。近いうちに２人で話し合ってみます」

それからしばらくして一夏の家で解散になった。
３人で千冬さんにお礼をして帰路についた。
帰り道に公園があったので弾に話があるから寄って行こうと誘い、人気のない所へ足を運んだ。
「あのね。私、代表候補生を目指したいの。今はまだ誘われてはいるけど、なれるかどうか分からない状態なの。なれたとしても土日も会えなくなる。ただ今の２人のままだと、どっちも上手くいくとは思えない。だけど、別れるのも嫌だし中途半端にしたくない。だから弾のちょうど良い距離を教えて欲しいの」
弾は私を抱きしめて
「俺もこのままだとダメになりそうで、なんとかしたかったけど、先に美樹に言わせたのはダメな男だよな。ゴメン」
「そんなことないよ」
「俺としては学校では今までと同じ距離がいいかな。くっついてると他のヤローの視線が痛いしな」
「そうなの？ゴメン」
「いいって。んで、学校以外の場所だと今の距離がいいな」
「そうね。いつもこの距離がいいけど、学校の中じゃ恥ずかしいもんね。また何かあっ

たら２人で相談しよ？」
「そうだな。お互い、ちょっとずつルールを決めていくか！」
「うん！」
　こうして２人は見つめ合い、約束を交わしながら唇を触れ合わせた。

第７話

５月最後の日曜日にＩＳ委員会の説明会が行われることとなり、その説明会に参加すべく会場に向かった。会場はＩＳ委員会日本支部の中にある第５会議室で行われる。

両親と一緒に会議室に入ると奥にホワイトボードと講師用の机、手前に３人がけの机が左右に２つと椅子が６つ用意されていた。

少ないなと思っていたが、両親は後ろに立ち、私は右側にある机の通路側に座った。

しばらくすると、水色の髪の少女と両親であろう人が入ってきた。この子の両親が私の両親に「今回は２組のようですし、貴方方も座って待っていればよろしいですよ」と言い、両親も私の隣の椅子へ座った。

予定時刻になるとスーツ姿の男性が会議室に入ってきた。

そしてホワイトボードの前に立ち

「皆さん初めまして。今回の説明会を担当させて頂きます橘と申します。よろしくお願いします。まず代表候補生とは何か、候補生とはなった後どんなことをするのか、しなければならないのか、等色々なことを説明させていただきます。質問はその都度していただいて大丈夫ですよ。ではまず～・・・・」

ｆｍｆｍ・・・
長くなりそうなので、要点だけ覚えておこう。
代表候補生とは
国家代表のサポートをすることもある
国家代表が引退した時に候補生から選ばれる
選出は支部の上層部が決める
他に大事なことは
２ヶ月程訓練生として法令や礼節などの勉強が必要である
扱いは軍人で国家公務員である（訓練生は対象外）
公務員だからアルバイト禁止
自然災害時は出動するかもしれない（学生時は免除されることもある）
怪我や死んでも文句は言わない
など覚えきれないほどあった。
最後のやつには引っ掛かるものがあったけど、軍人扱いだから言わないとまずいらしい。
これらのことを踏まえた上で、代表候補生になりたいと思うなら申込用紙にサインして欲しい、と言われた。

まず父が申込用紙に必要事項を記入し、私も記入して橘さんに渡した。
隣の子もどうやら書き終えたようだ。
そして6月1日より訓練生になり、平日は休みだが土曜は14時から、日曜と祝日は9時からこの第5会議室にて法令などの勉強が開始されることになった。

今日はこれで終わりらしい。
隣の子も帰ろうとしてか立ち上がったので、私はその子の前に立った。
「私、栗原美樹。よろしくね」
と言い、右手を出した。その子は照れながらも
「私は更織簪です。よろしくお願いします」
と握手を交わして、お互いの携帯電話の番号を交換して家へ帰った。

第８話

６月になり今日から訓練生となったが、まだ平日のため訓練は始まっていない。
今はまだ気にしてもしょうがないので、夏服に着替えて学校に向かった。

ＨＲの時間になり、来週の木曜日から土曜日にかけて中間テストがあると発表された。午前だけようだし、テスト勉強も頑張らないとね！
昼休みになってお昼ご飯の話題はやはりテスト関係が多かった。授業を見てると一夏は学年でもトップクラスに成績が良さそうで、鈴と弾は英語と社会が苦手な感じかな。実際、私も英語は苦手だ。
鈴はそれでも来週まで遊びたかったようだが、一夏の「入学して最初のテストで赤点取ってもいいのか？」の一言に撃沈された。
そして平日の放課後は図書館や４人の家で軽い勉強会を開く事にした。

そして土曜日の授業が終わり、ＩＳ日本支部に向かうには早い時間だったので一旦家に帰った。１３時になり、バスや電車の混み具合の確認をしたかったので、早めに家を

出た。３０分程で到着し、時間に余裕がある事が分かったので、コーヒーショップで１５分ほど時間を潰して第５会議室へと向かった。

時間になり法令を担当してくれる講師の方が来て、授業が開始した。途中、法令の裏をかく方法も教えられ、面白い反面、これ教えてもいいのかな?と思ったりもしたが、『そう言う連中から身を守るための処世術として覚えといてね』と言われて納得した。

１６時になると１５分の休憩時間となり、休憩所があるらしく案内してもらった。

休憩所には無料のお茶やコーヒーサーバーがあるらしく、興奮してしまった。

簪さんと軽く世間話をして、ちょっとずつだけど仲良くなっていった。

休憩時間も残り僅かとなり、部屋へ戻ろうとすると法令の講師さんから別の部屋へと案内された。そこでＩＳスーツのために身長や体重を計測することになった。測定し終えると、ＩＳスーツのカタログを渡された。まだまだ先になるが実機訓練時に支給されるスーツはノーマルタイプだけど、自分で好きなデザインのスーツを買うことについては許可されていると教えてもらった。

第５会議室に戻ると、今度は礼節の授業となった。基本的なマナーから、政府主催の晩餐会でのマナーなどを教わるようだ。

ちなみに、桜を見る会のような総理大臣が主催する公的行事は国家代表にならないと行けないらしい（笑）

この授業は聞くだけでなく、実践して身体に叩き込まれて大変でした。
１８時近くなると今日の授業は終わりの様で帰る準備を始めていると、説明会の担当だった橘さんが入ってきた。何やら大きな段ボールが乗った荷台を引いて。
「今日はお疲れ様。頑張ったご褒美にプレゼントだ～」
と言うと段ボールをおもむろに開けた。
「じゃ～ん　ＩＳ学園でも配られる参考書！来月から実際にＩＳに乗るから、それまでに半分は覚えておいてね。あとはノートパソコンとスマートフォンね。」
どう考えてもプレゼントとしては最後の２つの方が嬉しいのだけど、と思いつつも橘さんが話をつづけた。
「このパソコンには参考書に書かれている単語の辞書だったり、他にも上級者向けの参考書も入っているから有効に活用してね。ウイルス対策もバッチリだからインターネットに接続しても大丈夫だよ。スマホは普通に利用してもらって構いませんが、利用料金が高すぎると本人に請求しますので注意して下さいね。あと代表候補生になるとＳＮＳをしていただきます。ブログでもＴｗｉｔｔｅｒでも何でも構いません。ああ、大事なことを忘れてた。」
私と簪さんが顔を上げると
「君たち個人の担当者の連絡先を渡しておくね。担当者は君たちの番号を知らないか

ら、帰るときに一度電話してね。それでは今日は終わりにしましょう。また明日ね～」

と言いながら、橘さんは出ていった。

私は簪さんと番号を交換して、担当者に電話をかけて家へかえった。

第９話

日曜になり今日も支部へと向かった。今日から荷物が少し増えた。

昨日の夜、橘さんからメールで「明日から今日配った参考書とノートと筆記用具を持参してね」と送られてきたからだ。「わかりました」と返信し、昨日のうちに用意しておいた。

会議室へ入ると、すでに簪さんがいた。挨拶を交わして少しお喋りをしていると講師の方が入ってきて授業が始まった。

授業な内容は、参考書の内容を中心に行われ、ＩＳに乗り降りする際の注意点やＰ．Ｉ．Ｃなどの専門用語の説明、剣や銃、ミサイルなどの特性など様々な事を学んだ。

専門用語などは参考書に書いてあるが、武器の特性はチンプンカンプンだ。理解に苦しんでいると簪さんが「銃は速度は早いけど威力は低い。逆にミサイルは速度は遅いけど威力は高い。そう考えると分かりやすいかも」と教えてくれた。確かに分かりやすい説明だ。

１０時半に一度休憩をして、午後まで授業は続いた。

お昼になり、講師さんや簪さんとご飯を食べことにした。３人で色々なことを話して

いる。簪さんは一つ上にお姉さんがいて、すでに代表候補生で、その中でもトップ５に入るくらい優秀みたいだ。担当さんは実は軍人で訓練生の講習や代表候補生の体力や精神力アップなど、様々なことをしているようだ。

以前、千冬さんから言われた体力作りのために行っていたランニングや腕立て、腹筋、背筋の他に、やっておいた方が良いことのアドバイスをもらった。

午後の授業も先ほどの続きで参考書に沿って行われた。午前の授業よりも更に専門的な内容になったが、ＩＳ搭乗者の実体験や思ったことなどを引き合いに出して、じっくりと教わることができた。

１６時近くになり授業も終わったようだ。いくら休憩があったとはいえ、難しい話に頭がパンクしそうになっていた。そこで担当さんが「今日はおつかれさま。橘さんを呼んでくるから待っててね」と言い部屋を後にした。

数分後に橘さんがやってきた。

「おつかれさま。いつもは全員グダ～ってなってるけど、今回は１人だけみたいだね」

これは仕方ないと思う！と心の中でツッコミを入れた。

「これから来月の終わりまでずっと続くから予習復習はしっかりとやるように」

と言われ、絶望感が増してくるのがわかった。とは言え、今は実際に全部覚える必要はなく、自分の性格にあった動かし方や武装を覚えていけばいいらしい。

そして解散になった時に橘さんか個人担当者さんに聞きたいことがあったので、今のうちに聞いてみた。
「私の学校は携帯電話の持ち込み禁止なんですが、携帯電話は学校の中でも常時持っておかないといけませんか？」
「ん～　今はまだいいけど、候補生になると常時持っててもらわないとね。なので学校に許可をもらわないといけないかな。もしダメって言われたら僕に電話してね。学校と話を付けるから。じゃまた土曜日にね～」
と言い部屋を出ていった。
私も簪さん部屋を出て、お互いに「またね」と挨拶をして支部を後にした。

帰りの電車の中で外を見るとまだ明るく、日が暮れるまで時間がありそうだったので、コンビニで軽いスナックやお茶を買い、弾の家へ向かった。
五反田食堂に着き中に入った。中では厳さんが仕込みをしていた。
「厳さん、こんにちは。弾は上ですか？」
「おお、栗原の嬢ちゃんか。上で勉強してるはずだぜ。ちょいと待ってな。」
と奥に向かい
「おーい、弾！お客さんだー！」

すると弾が
「爺ちゃん、テスト期間なんだから今週手伝いは勘弁してくれよ」
と言いながら降りてきた。私は
「ヤッホー！来たよ～」
「あれ？美樹？講習は終わったのか？」
「うん、終わって直行しちゃった♪ほい、お土産」
「サンキュー。そうだ数学でわかんね～問題があるから教えてくれるか？」
「オッケー♪おじゃまし～す」
と言い上に上がった。
あまり長くいるとお母さんも心配するので、１７時半頃まで勉強していた。
帰る頃になると弾にギューっと抱きしめてもらい、支給された携帯電話の番号を弾に渡して家へと帰った。

第１０話

７月に入り、もうすぐ夏休みということもあり、クラスの皆は浮き足立っていた。
私は上手くいけば８月は候補生として訓練漬けになると予想しているので、私たちは今月最後の平日２日間を４人で海に行く計画を立てた。
たが、忘れてはならない魔の期末テストもあるので気を引き締めることも忘れてはならない。

そういえば、携帯電話の件も担任の先生に確認したところ二つ返事で許可が出た。
ただしテスト中などはマナーモードで先生に預けるように、と少ないながらも条件付きではあるが。そして訓練生ということも誰にも言わないように秘密にしてもらった。
ちなみに以前から弾たち３人には訓練生のことは秘密にしてもらっていた。代表候補生になれなかった時、恥ずかしいからね。
しかし、そうも言っていられないの事件が起こることになった。

７月の２週目になるとテスト週間になり、私たちは中間テストの時と同様に放課後４

人で集まり猛勉強してテストに臨んだ。
結果は中間テストの時よりも４人とも、ちょっとだけ順位が上がった。
この頃になって、最近なんだか一部生徒の雰囲気が悪くなっていることが多くなってきたように思えるようになってきた。
最初はテストの点数が悪かったのかな～と思っていたけど、成績優秀な男子生徒もいたので疑問に思っていた。
お昼の時間に３人に聞いてみたところ、弾と鈴に思い当たることがあるという。
「結構前からあったけど、最近になって女性権利団体ってのが台頭してきたんだよな。もしかしたら、そのせいかもしれないな」
「そうね。前は男女平等を謳ってたくせに最近じゃ女尊男卑を謳ってるわよね。『ＩＳに乗れるのは女だけ。私は女なんだから偉いんだ！』なんてね」
へ？意味が分からない・・・
女性でもＩＳに乗れない人の方が多いのに？
とは言え、男子生徒のことは実際に現場を見たわけじゃないので見かけた時に対処するしかないのかな。
と思っていると、数人の女子が例の男子生徒に「焼きそばパンを買ってきなさいよ」などと言ってる声が聞こえた。私はその女子たちのボスっぽい竹内さんに近づき

「なんでそんな事をしてるの？」
「ん？私たちは女で偉いんだからコイツらを使ってるのさ、アンタも使うか？」
と悪びれることなく女子たちは言っていた。
「そう、なら私も命令させてもらうね」
私は男子に向かって
「もうそんな命令聞かなくていいんだよ」
と命令？した。
すると、女子たちのボスらしき人が私に対して
「ああ⁉なんの権限があってそんなこと言ってんだよ」
「あら、私も女なんだから偉いはずよね？なら私の言うことも聞くんでしょ？」
「私の親は権利団体でも権力があるんだ！アンタと私とじゃ全然違うんだよ！」
「でもそれは『竹内さんの親が』であって、竹内さんが権力を持ってるわけじゃないんだよね？」
「うるさい！親に頼んで、アンタの親なんかクビにしてもらうんだから！」
「それは困るわね。それなら私は代表候補生の立場を使うしかないかな？」
「なっ・・・　代表候補生だと・・・」
周り皆は驚いていたが、

「ええ、正確にはまだ訓練生だけど、来月には代表候補生になれるつもりよ」
竹内さんたちは自分たちの方が分が悪いとわかってはいるようだが、まだ納得がいってないらしく私を睨んでいる。そこに一夏が来た。
「まぁまぁ、喧嘩してないで皆仲良くしようぜー」
と若干ズレた発言だったが、一夏の人柄か後ろ盾である千冬さんをも相手になると、さすがに手が出せないからか、渋々自分のクラスに戻っていった。
私と一夏は男子たちにお礼を言われ「どういたしまして」と言葉を交わし、一夏と席に戻って行った。
席へ戻ると鈴から
「何自分から秘密バラしてんのよ。私なんか苦労して誰にも言ってないんだからね。まぁ今回は、ああでも言わないとダメだったからいいけどさ」
「ゴメンゴメン、今度何か奢るから」
この時、私は皆に謝らないとな～と少し憂鬱な気持ちになった。

その日、家へ帰るとまずＩＳ委員会日本支部の個人担当に電話をかけた。
「もしもし、栗原です。実は・・・」
と、お昼の出来事に対しての謝罪をした。すると

「よくやったわ！」

何故かお説教ではなく褒められた。

最近日本支部の女性社員さんが、権利団体からの勧誘がひっきりなしにあるそうで、全女性社員さんが迷惑していたらしい。そのため、今回の事を引き合いに権利団体の勧誘を締め出すそうだ。そして、父の仕事についても守ってくれると約束してくれた。

そして、父が帰ってくると両親にも今回の事を伝えて謝罪をした。

両親も褒めてくれたが、父からはあまり危険なことはするなよ、と言われただけで済んだ。

その後、テストが前回より良かったことを引き合いに水着を買うためのお小遣いを請求することに成功した。

その日の夕食後、竹内さん親子が家に来て、竹内さんと両親に全力で謝罪された。

私は特に被害はなかったので、例の男子生徒に謝ったのならそれで良いと伝えた。

こうして今回の件は無事に収束を迎えた。

第１１話

７月２８日、今日は鈴と２人でレゾナンスへと来ていた。もちろん明日、明後日のために。

早速水着売り場へ向かうと、ずらっと並んだ可愛らしいカラフルな水着に次から次へと目を奪われていった。すぐに鈴はビキニのコーナーへと向かって行った。私がビキニコーナーに着いたときには、すでに何着か選んでいた。確かに可愛いのは多い、でもこの辺の水着は大人向けなので値段が可愛くない。その事を鈴に伝えると、フックへと戻しだした。

端っこの方に小中高生向けのコーナーがあったので、そちらに向かった。

そこには可愛いと言うよりも可愛らしい水着が並んでいた。まぁ子供向けだからね・・・

２日間ということで２着選ぶことにしていた。鈴と選んでいると、突然後ろから目隠しされて

「だ～れだ?!」

え？　鈴の声ではないし鈴は目の前にいたので、誰かはわからない。

「えっ・・・　だ、誰ですか？」
　すると、「ジャーン！」と効果音が聞こえるくらいのポーズを決めた見たこともない少女が立っていた。
「あ、あなたは！　どなたでしょうか？」
　オヨヨヨとショックを受ける少女に
「冗談ですよ。更織刀奈先輩♪」
「まさか、後輩に揶揄われるなんてね。オネーサンびっくりだわ」
「簪さんから色々聞いていましたので。あ、紹介します。親友のファン　リンインさんです」
「よろしくね」
「こちらこそ」

「ところで水着を買いに来たということは、２人は海かプールにでも行く予定なのかしら？」
「はい、えーっと、明日と明後日、私と鈴と千冬さんの弟さんと私の恋人の４人で海に行く予定です」
「あら、楽しそうね。もしよければウチの別荘に来ないかしら？近くにプライベート

ビーチもあるし可愛い水着もたくさんあるわよ。泊まりがけで、明日出発して明後日帰ってくる予定なんだけど」

「いえ、先輩のご家族に迷惑に迷惑をかけてしまいますので」

「親は行かないわよ。私と簪ちゃん、あと私たちの従者2人の4人よ。ちょうど男手も欲しかったし来てくれると助かるわ」

それって一夏と弾をこき使うってことじゃ?と思っていると、鈴に向かって小声で

「プライベートビーチだから邪魔者はいないし、可愛い水着で悩殺できるわよ?」

「私行きたい!」

何て言ったかわからないが、鈴が堕ちた・・・

仕方なく弾と一夏に電話してみると、あっさりとOKだった。

刀奈さんと電話番号を交換し、集合時間と場所を決めて、弾と一夏にも伝えて私たちは帰った。

翌日、私たちは少し早めに待ち合わせ場所に向かったが、待ち合わせ場所にはヤ○ザもビックリな高級ハイヤーが3台並んでいた。

その時、先頭のハイヤーから刀奈さんが飛び出し、追うように3人の女子が出てきた。

皆で挨拶を済ませて、私たちは2台目のクルマに乗り込んだ。

別荘に着くと建物の大きさに私たちは驚いた。何せ私の家の２軒分もあったのだ。しかも、これでも小さいらしく驚き疲れてしまった。

ちょうどお昼時ということもあり、皆でお昼ご飯の用意を始めようとした。ただ、台所に８人も並べないので順番に担当することにした。

以前言ったかもしれないが、私は料理が得意ではない。なので得意な人とペアを組んだ。

私と刀奈さん、刀奈さんの従者である布仏虚さんだ。因みに虚さんは毎食事を担当するつもりだったが弾、一夏、鈴ペアの希望もあり、今日の昼食はお休みとなった。

私たちは今日の夕食を担当することになったので、周辺を散歩することにした。目の前に見える海に目を奪われつつ潮の匂いを感じていた。すると袖口の余ってる服を着た簪さんの従者である布仏本音さんが付いてきてくれた。

「ミキミキ～　散歩なら付き合うよ～」

「一緒に行きましょ」

と言うと、手を繋いでブラブラ歩きだした。

１５分程歩いて別荘まで戻ると、ちょうど良いタイミングで昼食ができたようだ。

皆で食べだしたが、美味しすぎて悔しい・・

刀奈さんなんて一夏に「お嫁に来ない？」なんて言い出して、鈴もアワアワしていた。

昼食を食べ終わると弾と一夏で片付けをしてくれるらしいので、女性陣は水着のある更衣室にて、それぞれ好きな水着を選んでいた。着替え始めていると、私と鈴、そして簪さんとシンパシーを感じた。【チッパイ同盟】を作る気もないけどお互い励ましあい、絆を深めていった。そんな時に刀奈さんから、私たち3人にプレゼントがあるらしい。箱見ると・・・　厚みのあるパッドだった。刀奈さんに憤りを感じながらも、せっかくのプレゼントなんだし、しょうがないから付けてあげようかな。

私たちが着替え終わると同時に弾たちの後片付けも終わったようだ。パーカーを羽織ろうとしていると、突然更衣室の扉が開かれた。犯人はもちろん一夏だ。わずかな沈黙の後、私たちの悲鳴と共に物が投げられ気を取り戻した一夏は慌てて扉を閉めたが、色々遅かった。リビングで正座をさせられて女性陣、特に鈴からのお怒りをいただいたていた。

お説教が終わった一夏がグッタリとした様子でパラソルやビーチチェア、マットを持ちながら弾と出てきた。

ビーチに着くとパラソルやビーチチェア、マットを設置して女性陣はパーカーを脱ぎ始めた。皆ビキニを着ている。

黒の虚さん、青の刀奈さん、水色の簪さん、赤の鈴、黄色の私、キツネの本音さん。

あれ？　本音さん、さっき白の水着じゃなかったかな・・・　可愛いからいいけど・・・

弾に近づいて行くと、弾は私を見ようとしない。ムッとなった私は弾の目の前に立とうとしても執拗に向きを変える。弾の両頬をつまみながら

「な・ん・で、目を逸らすのかな？」

「いや、健全な男子中学生としてはものすごく見たいけど、似合いすぎて見れないんだよ／／／」

「嬉しいけど、できたら真っ先に言って欲しかったよ」

と言いながらマットへと向かい

「弾にはこれをお願いしようかな」

と日焼け止めクリームを弾に渡した。

「ちょっ、さすがにこれはまずいって・・」

「弾なら変なことしないから大丈夫でしょ」

「その無駄に高い信頼はいったいどこからきてるんだ？」

「あははは。まぁ少しぐらいならエッチな所触ってもいいんだぞ／／／」

と言い、片側のカップを少しずらした。弾は驚いたが、何故か苦笑いをしている。不思議に思い下を見ると、おもいっきりカップが見えていた。落ち込んだ私がふと横を向

くと刀奈さんが肩を震わせているのが見えた。刀奈さんにも見られていたのか・・・

その後、弾は変な所を極力触らないように日焼け止めを塗ってくれた。

日焼け止めを塗った後は海に入り泳いでいたが、いつの間にか刀奈さんと虚さんがビーチバレーのネットとポールを用意していた。

刀奈さん虚さんチーム対簪さん本音さんチームで対戦していたので応援のために近づくと、弾が虚さんを見て鼻を伸ばしていたので頬をつねってやった。フンッ！

17時頃になると私と刀奈さん、虚さんの夕食メンバーは先に上がり、順番にシャワーを浴びて料理を開始した。

夕食はカレーライスとサラダと味噌汁だ。

私は虚さん監修の元カレーを担当した。

まずタマネギと皮を剥き、くし形に切る

人参も同様に皮を剥き一口大の大きさでくし形に切る

じゃがいも皮を剥きつつ、しっかりと芽を取り除きながら一口大に切り揃える

お肉をお好みの大きさに切る

お鍋にサラダ油を馴染ませ中火にかける

お鍋でタマネギを炒め、じゃがいも、人参、お肉の順に炒める

全体に火が通り、タマネギがしなっとしてきたらお水を入れる
灰汁を取りながら具材が柔らかくなるまで煮込む
お玉でお湯をすくいルウを溶かしながら入れる
弱火でじっくり煮込む
とろみがついたら完成ー♪

虚さんのサポートのおかげで無事に出来上がった。あのサポートがなかったらまだ出来ていなかっただろう。カレーの道は奥が深く、今回のカレーを基本とし、リンゴやヨーグルト、ガラムマサラなどを入れる家庭もあるようで千差万別らしい。カレー道に終わりはなく、もし究極のカレーと言うならそれは母親のカレーだと思う、と語る虚さんを母や姉のように感じてしまった。

ちなみに刀奈さんは、サラダとお味噌汁だけでなくご飯まで準備してくれていた。お嬢様なのに手際が良すぎない?!

しばらくすると皆が帰ってきた。それぞれシャワーを浴びて夕食となった。

皆にカレーを褒めてもらい、少しホッとしながらも嬉しくなった。

この別荘のお風呂は１０人ぐらいなら余裕で入れると言うことで、夕食後に女性陣で入ることになった。大きいお風呂に興奮しながらも、虚さんと刀奈さんのスタイルの良さに血の涙を流しながらチッパイ同盟の3人は隅っこの方で落ち込みながら体を暖め

ていた。
お風呂からあがった3人で牛乳1パックを飲み干したとか・・・
弾と一夏もお風呂から上がり、皆リビングでくつろいでいると簪さんから
「そう言えば美樹さんの誕生日って来月の5日だよね？　何か欲しいものある？」
と聞かれた。特に欲しいものはなかったので、そう伝える前に
「えーっ！来月の5日ってもうすぐじゃない！何で言わないのよ！」
「そうだぜ、前もって教えてくれよ」
と言われたが
「自分からプレゼント強請ってるみたいで言えないよ。それに特に欲しいものもないから大丈夫だよ」
すると刀奈さんからも
「私たちも何かプレゼント用意しようかしら」
「いえいえ、刀奈さんたちからは今回の別荘の招待で充分ですから」
ニマニマ笑ってる刀奈さんを見てると遊ばれた感がハンパないや。
この時、プレゼントじゃなくて気持ちでもいいのか、と気づいて
「ねえ簪さん、プレゼントって訳じゃないけどお願いがあるんだけどいいかな？」
「うん！何でも言って！」

「あのね、さん付けやめない？せっかく仲良くなったのにさん付けのままだと、ちょっと距離を感じちゃって・・・」
「わかった。　み、美樹／／／」
「うん。かんちゃん／／／」

皆、ホッコリしながら1日を終えた。

第１２話

翌日の朝、私はいつも通りに目覚めた。以前千冬さんから体を鍛えた方が良いと言われ、その翌日から毎日５キロのランニングと腕立て伏せ、腹筋、背筋を３０回行なっている。

始めたばかりの頃は３キロ走るだけで精一杯だったし、腕立て伏せも腹筋も背筋も１０回が精々だった。

１階へ降りると、すでに虚さんとかんちゃんが起きていて朝食の準備をしていた。虚さんにランニングしてくることを伝えて別荘を出た。今日はランニングだけにしようかな。とりあえず体を伸ばして軽くストレッチから始める。ストレッチが終わると私は別荘へと来た道を軽いステップで走りだした。知らない土地だったので周りに家もないし距離を測りづらい。なので、いつも通り２０～２５分くらいの時間を走ろうかな。

ランニングが終わり別荘に戻り、朝食時間を待っていた。数分後、他の皆が降りてきて皆で朝食をいただいた。今日は午前中は遊んでお昼後に帰ることにした。女性陣は昨日とは別の水着に着替え、海に向かう。

今日は海にも入るが、ビーチフラッグや砂山崩し、砂の城作りなど砂浜での遊びをメインで遊んだ。ビーチブラッグで私ｖｓ虚さんの対戦の際、私の上に飛び込んだ虚さんのポヨポヨに、勝負に勝ったけど試合に負けた気分になったよ。

砂の城作り対決になると皆、黙々と作業に取り掛かっていた。あの賑やかな刀奈さんですら真剣に砂を削っては盛っている。途中、鈴の「あ～もう！じれったいわね！」や「また崩れちゃったじゃない・・・」の声が響いた。しばらくして完成したお城のお披露目になった。刀奈さんやかんちゃん、虚さんは上手そうだとは思っていたけど、本音さんもキレイなお城を作っていた。あんな袖余りのキツネの着ぐるみであのお城を作るとは・・・。私や弾、一夏が作ったお城は至って普通だった。鈴が作ったお城は・・・

途中で諦めたのかグチャーってなっていた。半泣きの鈴を宥めるのに苦労したよ。

そろそろお昼近くになり、別荘に戻ることにした。昼食の献立を考えるため、虚さんが冷蔵庫を開けて材料を確認していた。冷蔵庫には野菜と麺が残っていたので野菜たっぷりラーメンに決まった。

野菜炒めは弾が調理することに決まった。と言うことで、ラーメン担当に立候補した。が、弾の一言で一夏に決定した。「弾の裏切り者ー！」

調理が終わり皆で食べ始めた。野菜はシャキシャキしてるし麺もつるりと入ってくる。スープもクドくない。

「美味しい」

へへへ、と照れる2人。「なにか秘訣でもあるの？」と聞くと野菜と麺は慣れとしか言いようがないらしい。けどスープに関して今回はスープの素にある脂を抜いたらしい。一夏曰く「野菜炒めで油を使ってるから、スープの脂を抜いた方がベタベタにならない」らしい。なるほど、ちょっとの工夫で美味しく感じれる腕前は凄く憧れるな。

食べ終わると私と鈴で最後の後片付けをした。ただ野菜を炒めた鍋は弾に任せた。油を使ってるから正直その処理方法もわかってないからね。器と鍋を洗い終えると、液体パイプクリーナーを排水溝に付けて15分後に水で洗い落として、排水管をキレイにしておくことを忘れてはならない。

その30分後、忘れ物がないかを確認して別荘を後にした。クルマに乗ってしばらくすると、私と鈴はすぐに寝てしまったようだ。お互い寄り添って寝てる姿を「姉妹みたいだったぞ」と一夏に揶揄われた。揶揄われるくらいならまだしも、弾にカメラで撮られたようで後で鈴と2人でお仕置きしておいたよ。

刀奈さんたちはそのまま帰宅したらしく、私たちが乗ってるクルマだけ待ち合わせの場所に送ってもらいました。私と鈴は寝ていたとは言え、まだ遊び疲れが取れてないし、弾や一夏も疲れてるのでここで解散となった。

家に着き荷物を片付けて、かんちゃんに電話して今回のお礼を伝え、「また明日」と電

話を切り、早朝メニューをこなしてないことも忘れて寝ることにしたのだった。

第13話

8月中旬になり、世間はモンドグロッソ一色に染まっている。千冬さんの大会2連覇がかかっているので特に日本の盛り上がり方は凄まじい様子だった。

そんな中で、私は弾にしか許したのことないキスをしていた。

7月末日、この日は土曜日で訓練生として最後の日であった。試験はすでに終えており、明日からいよいよ代表候補生としてＩＳに乗って訓練に入ると言うことで、私とかんちゃんは訓練施設に連れていかれた。日本支部からすこし離れた場所にあり、とても広い体育館のような所である。案内してくれた橘さんと共に私たちも体育館に入って行く。すると5台のＩＳが縦横無尽に動き回り、銃やビーム兵器を撃ちまくっている。刀奈さんもいて、ハイパーセンサーで見えているだろうと思いつつも邪魔にならないように頭をペコっと下げるだけにとどめた。しばらく訓練を見ていると「明日から君たちもここで訓練に入るんだよ」と言われ、私は付いていけるか不安な気持ちになった。橘さんは「ここにいる人たちは何年も候補生として頑張ってる上に専用機持ちも3人いるんだよ。だからすぐに同じ動きが出来るわけないよ」と言ってくれた。

翌日、訓練施設に入ると受付のお姉さんに待合室に連れていかれた。数分後、受付のお姉さんとかんちゃんが来て、更衣室へ案内された。更衣室に入るとＩＳスーツが置いてあり、着替えるように指示された。着替えが終わると施設の案内が行われた。次に先輩方への挨拶のために訓練所へと向かった。

訓練所に入ると先輩方が待っていてくれたらしく、一列に並んでいた。私たちは所長からの合図で

「栗原美樹、中学１年生です。本日付けで代表候補生となりました。よろしくお願いします」

「更織簪、中学１年生です。同じく本日付けで代表候補生になりました。よろしくお願いします」

先輩方の自己紹介も終わり、私たちはさっそく訓練に入った。まずは暮桜に乗り歩行から始まった。一応歩けはしたけど、スムーズとは言えない歩き方だった。途中先輩の「ＩＳを装着した状態が自分の体だと思って歩いてみたらどうかしら？」と言うアドバイスを頂いて何とかマシにはなってきた。

多少スムーズに歩けるようになると、銃での射撃機訓練を行った。この訓練はＩＳを

装着しての訓練と未装着での訓練を行ったが、どうやら私に射撃はセンスの欠片もないみたい。ＩＳ装着時に１０発中５発、未装着時に１０発中１発しか当てれないのだから。むしろ２０、３０と増えるごとに、まったく当たらなくなってくる始末なのだ。先輩もこれには呆れてたよ・・・

射撃ができなくても訓練は厳しくなっていく。今度はサークルロンドをすることになった。私とかんちゃんで反時計周りに回って、お互いに銃口を向けながら円起動を描いていく。徐々にスピードを上げつつ、射撃に回避しながら円軌道に戻っていく。慣れてきた頃に上下移動もプラスされるようになり体力、精神的にもキツくなってきたが、下手な私に付き合っているかんちゃんの方が疲れているだろけど。

週に一度は休みはあるけど、ほぼ毎日と言ってもいいくらい帰るとすぐにシャワーだけ済ませてお布団と仲良くしている。

そんな生活が２週間ほど続いたが、モンドグロッソも近いと言うこともあり、しばらく訓練は午前中だけになった。それで気を緩めた私は中庭で眠るように倒れてしまった。この時、枕を抜かすと弾にしか許したことのない唇を中庭の草に許してしまった・・・気にしないけど・・・

モンドグロッソが開催された。

一夏は応援のために開催国のドイツへと観戦に行っている。前回大会の覇者である日本代表である千冬さんが姉なのだから当然なのかな。

開会式が始まると訓練所の大型モニターにテレビ中継の映像が映し出された。今回は前回大会の1位と2位の国は2人、それ以外の国は1人が出場となっている。前回優勝した千冬さんを先頭に次々と各国の代表が出てきた。まずは格闘、射撃、近接、飛行部門からスタートされた。千冬さんと前回2位のイタリア代表のアリーシャさんはシードのために出場しないようだ。各部門が開始され、日本からは射撃部門に代表候補生ながら、かなりの射撃の腕前を持つと言われている山田真耶さんが出場し、結果は他国の代表を相手に2位と素晴らしい成績を収めた。

各部門のヴァルキリーが選出された翌日、決勝トーナメントが行われることとなり、組み合わせ抽選会が行われた。千冬さんとイタリア代表のアリーシャさんはシードの為に出場は確定となっており、順当に勝ち進めば、また決勝の舞台での対戦が見れるようになっていた。

圧勝で終わらせる千冬さんに対してアリーシャさんはキレのある技や格闘ゲームのようなコンボ技で勝利していた。このように2人に違いはあれど、各試合で観客を魅了していた。

そして、ついに決勝が行われることになった。まず千冬さんの名がコールされたが、出てこなかった。何度もコールしても結果は同じだった。そして千冬さんを飛ばしてアリーシャさんの名がコールされた。アリーシャさんは各方向に手を振っているが、顔が笑っていなかった。その後何度か千冬さんの名がコールされたが出てくることはなかった。

私たちも不思議に思っていたが、現地の情報が無いので何も出来ないでいた。

やがてドイツの大会本部でもこれ以上待てないらしく、決勝はアリーシャさんの不戦勝となってしまった。表彰式でアリーシャさんの「私は千冬に勝つまでブリュンヒルデは名乗れないわ」の一言に、全女性が惚れたことだろう。この一言に私は、本当のプライドの意味を知った。

翌日の閉会式でも千冬さんの姿を見ることはなく、日本選手団は帰国することとなった。

帰国後すぐに記者会見が開かれたが、久しぶりに千冬さんを見るとだいぶやつれていた。そして決勝のあらましを聞くことが出来た。日本支部長さんは

「決勝に織斑千冬君が出なかったのは、千冬君の家族が事件にあったからなのです。詳しい事は話せませんが、この事故により決勝の出場を見送りました。この決定は委員会が決めたことであり、千冬君とその家族に何の責任もないことをお伝えします」

そして次の千冬さんの発言

「私、織斑千冬は国家代表を引退します」

世界が震撼した。が、それを無視するように話の続きが始まった。

「元々第２回大会が終わり次第引退して、後進の育成の道に進むつもりでした。それに今回の事故で、もうこれ以上家族を失いたくないので、すぐ近くにいたいと思ってます。あと個人的にアリーシャに伝えたいことがあります。近いうちに、どちらかの国で決勝の続きをして欲しい。それだけが心残りだから・・・」

その後、しばらく質疑応答が続いて会見が終わった。

第１４話

昨日見た支部長さんと千冬さんが行った会見の翌日も訓練があるので訓練所へと向かった。千冬さんの引退のせいか、千冬さんの家族の無事を心配してか、どことなく覇気がないように思える。

お昼休みになり、ご飯を食べていると所長から応接室へ来るようにと言われ、応接室へ案内された。所長と部屋へ入ると、そこには千冬さんがいたのだ。さすがにビックリしたが、まず出た言葉が

「まだやつれてますね。ちゃんと寝てますか？」

だった。千冬さんは「小娘に心配されるとはな」と言いながら少し笑顔になった気がした。そして所長を退室させ、モンドグロッソで起きた事を説明してくれた。

「一夏は事故ではなく準決勝の時に誘拐されたんだ。犯人たちの要求通りに、私は言われるままある場所へと向かった。そしてそのまま一夏は開放された。その後試合会場へと向かったが試合は終わっていた。どうやら犯人たちの目的は私が決勝に出ないようにすることだったようだ。・・・これが今回の顛末だ。すまなかった」

「んー、何に対して謝ってるのかわかりませんが、一夏は無事だったんですよね？」

「ああ、擦りキズはあったが、大きい怪我はない」
「そうですか、ありがとうございます。一夏が無事でよかったです」
その後しばらく、引退のことや質疑応答のことで色々聞いて全容が明らかになった。
そして千冬さんは
「そういえば栗原はどちらかと言えば近接型のようだな」
と聞いてきた。
「そうですね。射撃のセンスがないと言われて最近はサークルロンド以外は、剣や槍の戦闘方法を学んでいます」
「そうか。１０月から1年ちょっとの期間になるが、私の所に出向する気はあるか？射撃の訓練はそこそこにして、剣での戦い方を教える事は出来る」
悩んでる私に千冬さんが
「まぁ今すぐに答えを出さなくていいが、来る予定なら来月までには教えてくれ」
「決めました。行きます！」
「そうか、詳しい場所などは追って連絡するとしよう。所長には私から伝えておく。あとモンドグロッソでのことは秘密にしててくれ」
と言って部屋を出て行った。
そういえばお昼ご飯、ちょっとしか食べれなかったな・・・

応接室での話が終わるとすぐに訓練が再開された。が、先輩方に所長に呼ばれてご飯をちょっとしか食べれなかったことを説明し、少し休憩時間を伸ばしてもらった。

その日の訓練が終わり、千冬さんの訓練を受けるために出向することを、私からも伝えるため所長に会いに行った。所長室に通されて千冬さんの訓練へ出向する旨を伝えた。すでに千冬さんから伝えられていたようで

「ええ、聞いてますよ。１０月からのようですが、帰って来た時にどれだけ強くなっているか楽しみにしてますよ」

絶対強くなって戻って来て下さい。的な副音声が聞こえそうな笑顔が怖いです・・・

第１５話

　１０月に入って最初の土曜日、今月から土日は千冬さんが訓練してくれる事になっている。場所が分かりづらいだろうからと、案内人を用意してくれてるらしく、指定の時間に待ち合わせ場所に向かった。すると
「あれ？何で皆がここに？」
「俺と鈴は一夏に誘われてここにいるんだけど・・・」
「俺は千冬姉から皆を連れて美樹の案内をしろって言われて・・・」
　４人とも訳がわからなかったが、とりあえず一夏の案内されるまま目的地へと向かった。
「そういえば学校以外でこの４人が揃うのも久しぶりな気がするな～。でも４日くらい前は会ったけどね」
「俺たちは結構つるんでたけどな」
「美樹は大変なんだからしょうがないって」
「そうだな。あ、美樹、誕生日プレゼントありがとな。あれ、結構使いやすくて助かるよ。皆もありがとな」

「ふふ、どういたしまして」

9月27日は一夏の誕生日だった。前々日くらいに私と弾、鈴の3人でレゾナンスへ一夏の誕生日プレゼントを買いに行った。弾は包丁研ぎ、鈴はスムージーのミキサー、私は以前一夏が見ていたテフロン加工されたフライパン、そして3人で小さいけどホールのケーキを贈った。

そうこう話してるうちに目的地へ到着したみたい。篠ノ之神社？皆で参拝でもするのかな？と思いつつも長い階段を登った。登ってしばらく歩いて本殿の横にある建物へと向かった。

中へ入ると、ここは剣道場のようで剣道着を着た千冬さんが竹刀を振っていた。

「来たか。よし、それでは栗原の剣の修行を始めるとするか。まずは一夏もこれに着替えろ。五反田と凰も後で手伝ってもらいたいから着替えてくれると助かる」

弾と鈴も手伝ってくれるようで、私と鈴は千冬さんに女子更衣室へと案内された。着替えている最中に

「剣を教えるのにISに乗ったままでもよかったがまずは剣の基本の型やら9つの斬撃を知らねばならんと思ってここですることにした。最初は一夏だけの予定だったが、凰や五反田のやつも暇になるかと思って連れてきた。まぁ五反田に一夏と栗原が私がいるとはいえ2人でいるからな、変な誤解をさせないためでもある」

と説明された。そこまで考えてくれてたのか、と思いつつも、逆に巻き込まれた鈴は納得してないように思えたが、「一夏のカッコいい所をみれるんじゃない?」と言うと納得してくれた。

着替えが終わり、道場の内回りを軽く走ったり、屈伸したりと各々のやり方で準備運動を行った。

まずは剣道の基本である素振りから始まった。上半身のみの素振りから行い、次に足も動かしながらの素振りを行った。次に袈裟斬り、右薙、右斬上、逆風、左斬上、左薙、逆袈裟を教わり各斬撃の素振りを行った。そして１７時になると道場の雑巾掛けを行い、訓練を終えた。今日の訓練は少々疲れたものの、弾と一緒にいることができたので、楽しくも嬉しくもあった。

翌日も道場での訓練で昨日の復習から始まり、お互いに防具を付けて一夏相手に打ち込みの練習や、一夏の攻撃を躱したり受け止めたりしていた。

午後からは皆と試合をした。ここからは試合形式で、制限時間はあるが、剣道とは関係なく好きに竹刀を振っても良い、とのことだった。但し、突きはなしとのこと。

鈴はあちこち動き回ったり、色々な角度から攻撃されて戦い辛い相手だった。

弾はやはりというか、少し遠慮気味な攻撃だった。千冬さんからのゲンコツもあって

か、途中から遠慮のない攻撃が増えてきた。
最後に一夏だか、一夏への攻撃は全く当てれないし、逆に私は一夏の攻撃を全く防御出来ないでいた。そして、そのまま試合は終了した。
その後また何度か3人と試合をして、16時になると訓練は終わりになった。最後に雑巾掛けをして、帰る際に千冬さんに呼ばれた。そして
「やつらは階段下で待たせてある。さて、剣道はどうだった?」
「そうですね。楽しくもあったけど、悔しくもありました」
「そうか、嬉しい答えだ。あの3人は今日までの約束でな、来週の土曜から日本支部の地下にあるアリーナで行う。ISに乗るからスーツを忘れるなよ。もし地下アリーナへの行き方が分からないようなら橘に聞いておけ」
「はい!」
そう言い、弾たちの待ってる階段下へと向かった。皆に合流して家へ帰った。
途中の別れ道で私は弾としばらく一緒に居たくて弾の腕をとって、あの公園へと向かった。
「休日にこうやって2人でいるのも久しぶりだね。5月以来かな?」
「あー、皆であってたから気にしてなかったけど、もうそんなにたったのか」
「あれから5ヶ月もたったみたいね。代表候補生になれたのは嬉しいけど、こうして弾

と２人きりになれる時間がないのはツラいかな」
「まだ中学生だから門限も厳しいしな。そういえば、何で代表候補生になったんだ？」
　と聞かれたとき、千冬さんにしか言ってない夢を弾に教えることにした。
「私の夢はモンドグロッソで優勝する事と宇宙へ行くことなの。元々は宇宙飛行士を目指してたけど、ＩＳが出来たことによって宇宙へ行くことができるかも、ってね。宇宙を目指してる企業があるなら、その企業代表として所属するのも有りみたいだけど、いきなり行っても門前払いされるのが目に見えてるからね。だけど代表候補生なら少なくとも腕があることは認めてもらえるから。でもモンドグロッソで優勝するのも夢だしね。それに出るならやっぱり優勝したいし、憧れの千冬さんと同じになれるからブリュンヒルデが欲しいの。そして、その称号を持って一緒に宇宙を目指したい人達を集めて色々な星を見たい。それが私の夢なんだ」
「そうか。美樹は凄いな。中１でそこまでハッキリとした夢を持って頑張ってるヤツなんてなかなかいないぞ」
「日本じゃそうかもね。でも世界を見ると私より小さい子が夢を叶えるために私以上の努力してる子もいるからね。私もまだまだかな」
「俺は美樹を応援したい。だけど頑張りすぎるのも良くないからな、ほどほどにってのもダメかもだけど頑張ってな」

「ありがとう、弾。さて、そろそろ帰ろっか」

と言い立ち上がると、弾は私の手を引っ張って出口ではない場所へと進んでいく。

『えっ、えっ』と焦る私を無視して弾はある場所へと進んでいく。到着するなり弾は私にキスをした。

「今までは美樹がキッカケを作ってたからな。たまには俺からしたくて・・・　ゴメン」

「何を謝ることがあるの？　私は嬉しかったよ。今までは弾が本当に私を好きなのかな？って思ってた事もあったけど、弾の気持ちを知れて嬉しかったよ。だから、ね・・・

もう一回／／／」

第１６話

１０月の第二土曜日から日本支部の地下にあるアリーナにて千冬さんの訓練が開始された。

橘さん曰く、ここのアリーナには国家代表や候補生の中でも国家代表に一番近い人たちが、たまに集まり厳しい訓練を行ったり後輩の育成論を会議しているようだ。全員が専用機を持っていて、国家代表の人は二次以降も近いと言われているらしい。橘さんからは「ご愁傷様」とありがたくないお言葉をいただいた。

打鉄を装着し、上位候補生との制限時間有りの一騎打ちで一太刀入れるまでは休憩なしだったり、さらには彼女たちと１ｖｓ２だったりと過酷なものだった。特に最近国家代表になった格闘型の『吉田香保里』さんには手も足も出せず、一方的な蹂躙に近いものがあった。それでも諦めず、何度も挑んではやられ、を繰り返した私は気を失っていた。

意識を取り戻した時、外を見るとすでに日が沈んでいた。治療室の先生によると４時

間ほど寝ていたらしい。そこへ千冬さんが来て視聴覚室へと連れられていかれた。そこで今日の訓練の様子をＤＶＤで見ながらのダメ出しとアドバイスを頂き、本日の訓練を終えた。

家に帰り自室にて千冬さんからのダメ出しとアドバイスを思い出してながらイメージトレーニングを行った。ただ上手くいきそうな気がするが、パズルのピースが上手く入らない様な気がしてモヤモヤが晴れないでいた。ただ答えが出ずに、意識を手放した。

翌日、千冬さんからのアドバイスを基に今日も訓練を開始した。しかし昨日のモヤモヤを解消できずに訓練は進んでいく。近接型の先輩と何戦かした時、バランスを崩した私に唐竹で追撃する相手の手を左手で受け止め、右手に持つ剣で相手を一閃した。その時パズルのピースがカチッとハマった様な気がした。

やっとまともに休憩をもらえた私は水分補給のため自動販売機に向かった。すると千冬さんが来た。

「最後の一撃は良かったぞ。それまではアドバイス通りだったが、キレがなかったからな」

「実は、昨日言われたアドバイスを基にイメージトレーニングをしたのですが、何かが足

りない気がしていてずっと考えていました。試合中のバランスを崩した時にふと先週の剣道を思い出しました。一夏が私に攻撃させることなく攻撃してきたことを。その事を思い出して実際にやってみると、私の中で上手くハマってくれました。ただ自分としてはガンガン攻めたいんですけどね」

「ふっ、そうか。それにしてもパワータイプなら葵で良いが、カウンタータイプなら、あのやり方だと葵だと長くて重いかもな。片手剣と小太刀のどちらが好みだ？」

「そうですね、個人的には長さを調整できるビームサーベルみたいなのが理想かもしれませんが、片手剣の方が好きです。ラピッド・スイッチが使えたら二刀流もいいんですが」

「わかった。すぐには無理だろうが準備してみよう。あとそろそろ休憩が終わるぞ」

「えっ、しまった。ありがとうございます！」

私はスポーツドリンクを飲み干して訓練を再開した。

休憩後の訓練は、私が一撃を入れたことにより、左手に注意を向けさせて攻撃したりとフェイント合戦になってしまった。

最後に国家代表の吉田さんとシールドエネルギーを０にする決闘方式での試合となった。試合は吉田さんが終始優位に進めて、確実に私のシールドエネルギーを減らしていく。対して私の攻撃は擦りはするが、まともに入れることができず０．５割を削っ

たところで勝負がついた。

大の字で倒れてる私に吉田さんが近づいてきた。私は打鉄を解除してお礼を言おうと慌てて立とうとしたが、さっきの試合で体力を使い切ったらしく上手く立てなかった。大笑いの吉田さんに肩を借りて更衣室の椅子に座ると

「お前のガムシャラに向かってくる姿勢は好感が高かったぞ。私を倒せるくらいに強くなりなよ」

と言って吉田さんは頭を撫でてくれた。「じゃあな」と言いながら更衣室を後にする吉田さんにお礼をしてシャワー浴びた。頭では勝てないと分かっている。悔しいと思うこと自体が失礼だ。専用機だからとかそんなレベルじゃない。同じ打鉄でも勝てないだろう。私なんかより長く候補生でＩＳに乗ってて、２００時間ほどしか乗ってない私なんかより遥かに長く乗っている。経験も違う。でも、「悔しい」意外に言葉はない。今は負けても、いつか必ず勝つ。この気持ちを忘れずに心に刻んでおく。

いつか世界の頂点に立つために

第１７話

１２月半ばになってくると、訓練は千冬さんとのｌｖｓｌが基本となってきた。国家代表の吉田さんたちとの訓練もしたかったが、皆さん私だけに付き合っている暇があるわけでもないので、そこは素直に受け入れている。まぁ実際は元とは言えブリュンヒルデとのｌｖｓｌの方が贅沢なのだ。文句なんか出るわけない。ただ本気になると、やっぱり一撃すら入れれない。

１０月の訓練以降、私の自主練でもあったランニングや腹筋などを倍に増やしていたので、以前のように途中で気を失うことはなくなったが、毎日のように肩で呼吸したり酸素ボンベが欠かせないでいた。

そう言えば、片手剣や小太刀のことも聞かされてないので、まだまだ見通しがつかないのだろう。なら今ある武器でなんとかするしかない。

けど、動きは確実に良くなっているのが分かる。今までだったら避けることが出来ないであろう攻撃を避けたり躱したりできるようになった。千冬さんのアドバイスとダメ出し、つまり飴と鞭の使い方が凄いのだ。こうして訓練は続いていく。

２４日になり、学校は終業式で明日から冬休みとなる。前日に千冬さんから「クリスマスは五反田といたいだろう。訓練はしばらく休みだから英気を養っておけよ」と最高のクリスマスプレゼントをいただいた。

終業式が終わると、私たちは家で着替えてレゾナンスへと向かった。まずは交換用プレゼントを極秘に買うことで、男女共に使える物を慎重に選んだ。買い物が終わると、ＧＷのようにゲームセンターでプリクラを撮ったり、最近サービスが開始された大型の筐体、ＩＳ／ＶＳアーケード版での対戦だったり、カラオケやボウリングで盛り上がった。

１７時になると、すでに外は暗くなっていたが、辺り一面キレイなイルミネーションで彩られていた。その幻想的なイルミネーションを見ながら一夏の家へと向かった。

一夏の家に到着すると、すでに千冬さんがケータリングの準備をしてくれていた。それぞれ手洗いとうがいを済ませ、実食ターイム！

美味しくてパクパク食べちゃってるけど、しばらく訓練がないようなので、食べ過ぎには注意しなきゃ！と思いつつも、この雰囲気で食べないという選択肢はないくらい賑やかなものになっていた。ただ、ケーキの分は残しておきます。そして明日から少しずつ減量しますので許してください・・・

翌日のクリスマス当日、私たちはお昼過ぎに一夏の家に向かった。冬休みとはいえ、多少の宿題が出されていたのでそれを終わらせることにした。特に私はお仕事の関係で、たまに授業に出ないこともあるので、こういった提出物は期限までに確実に提出したい、と思っている。宿題もひと段落したところで休憩することになった。一夏が飲み物を持ってくると言うことで鈴も手伝うと一夏についていった。急に弾と２人きりになり照れ臭くなったが、お互いに寄り添っていた。そこへ一夏と鈴が戻ってきた。鈴に

「あんたたち、ちょっとは我慢しなさいよ」

と言われ、照れ笑いするしかなかった。そこで一夏が

「いいな～、俺も彼女が欲しいぜ」

と言ったのだ。

「お前なら彼女くらいすぐできるだろ」

「俺、モテないしな～」

いや、一夏ほどモテる男は知らんよ！とツッコミたかったがグッと堪え

「モテなくたって彼女はできるでしょ。深く考えずに自分が好きだって思える人と付き合えたら、モテるモテないなんてどうでもいいと思うよ」

「まぁな、俺はモテないタイプだけど美樹と付き合ってからはそんな事どうでもいいし」

「そんなもんなのか？」

「とりあえず一夏はもうちょっと周りを見たほうがいいかな」
「ん？どういう意味だ？」
「少なくとも4月から、嬉しい時も楽しかった時も、ずっと一夏の隣にいたのは誰？モンドグロッソが終わって、落ち込んでた一夏をずっと献身的に励ましてたのは誰？もしかしたら一夏にはもったいない子なのかもしれないよ？」
そう言われ一夏はハッと気づいたのか鈴を見つめた。それ見て私と弾は部屋を後にした。

その日の夜、鈴から電話があり一夏と付き合うことになったみたい。あの後のことを聞いたら2人らしいやり取りの後で告白されたらしい。
鈴、一夏　おめでとう♪

第１８話

２月１３日、私は家で翌日のバレンタインデーに向けて、チョコレート作りに励んでいる。私はお菓子作りは得意ではないので、母に教わりながら作っていく。（普通の料理も得意じゃないけど・・・）

まず、何を作りたいのかを決めるためにバレンタイン特集の載った雑誌と難易度を見ながら、チョコチップマフィンに決めた。

常温で柔らかくしたバター（５０ｇ）をボウルに入れ、泡立て器でクリーム状にして

上白糖（７０ｇ）と卵１個を入れてよく混ぜる

薄力粉（１００ｇ）とベーキングパウダー（小さじ１杯）を合わせてふるう

ふるった粉の半分をクリームに入れて、粉っぽさがなくなるまで混ぜる。

混ぜたクリームに牛乳（３０ｃｃ）を入れて混ぜる

ふるった粉の残りと牛乳（３０ｃｃ）を入れて更に混ぜる

７ｍｍほどにカットしたチョコ（２５ｇ）を加えて軽く混ぜる

マフィンの型に生地を半分ほど入れ、オレンジマーマレード（大さじの半分）を入れる

その上から生地を入れチョコ（２５ｇ）を表面に散らして乗せる
１８０度のオーブンで２５分ほど焼く
と出来上がるのだけど、お菓子作り初心者の私は悪戦苦闘しつつも、なんとか作ることが出来た。
まずは味見をして失敗がないか確認してＯＫそうなので、弾に３個、一夏と父親用に２個と友チョコとして鈴に２個の９個を作り上げた。

そしてバレンタインデー当日、私は鈴と一夏用のマフィンを持って学校へ登校した。教室へ着くと既に鈴がいたので、鈴に渡した。「何で私に？」な顔をしてる鈴に「友チョコだよ」と言うと「ゴメン、私、美樹の分持ってこなかった」と謝られたが、私が勝手に作ったんだから問題ない。そして弾と一夏が登校してきたので、一夏にも友チョコという名の義理チョコを渡した。弾には「帰ったら食べさせてあげるね」と言うと凄く喜んでた。

学校が終わり弾は一旦家へ帰ってから私の家へ来ることになった。私も家へ着くと私服に着替えて、色々準備をしながら弾が来るのを待っていた。マフィンと紅茶も準備してあるので、母が来ることはないと信じたい。しばらくして弾が来たようなので自室

へと案内した。弾は私の部屋に入るなり、なぜか感動して泣いてるみたい。そんな弾を座布団に座らせて、早速食べてもらった。一口大にちぎったマフィンを「あ～ん」と言いながら弾の口に運んでいく。お礼にと言いながら弾も私に「あ～ん」をしてくれて、お互い照れながら食べていく。パサつく口を紅茶で潤わせ、唇を触れ合わせていく。

第19話

3月1日は鈴の誕生日である。一夏の時と同じように前日にレゾナンスに集まり、グルっと見て回った。まずは雑貨店に入り鈴の好きそうなモノをいくつかピックアップしてみたが、見当たらなかった。

一夏はコレだと思ったものが見つかったようで会計をしていた。会計後に何を買ったのか聞いたところ、黄色のリボンのようだ。何気に一夏のプレゼントってハズレがないんだよね。私の時もそうだったし。

弾はうーんと悩んでいたので、ポケモンのハンカチやお菓子などを勧めた。実は私の時もハズレを引くところだったらしく、直前に鈴に止められたようだ。

さて、私はどうしようかなと辺りを眺めていると不意に目が奪われたものがあった。無地で3×1cmのプレートのネックレスだった。下には緑の硝子製の石が入っていた。私はプレートに文字を掘ることが可能か聞いた。すると有料だがやってもらえるらしく、

表に

【3／1　　】

【ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ】
裏に
【ＤＥＡＲ　ＢＥＳＴ　ＦＲＩＥＮＤ】
【　　ｆｒｏｍ　Ｍｉｋｉ】

とお願いした。

１０分ほどで出来上がったようで、料金を支払いネックレスを受け取った。

翌日学校が終わり、一旦自宅へ帰ったあとに鈴の家に集まった。鈴の家は中華料理屋さんで私はここのチャーハンがお気に入りです。弾の時と同じように今日の主役の恋人を最後に回して、私と弾がプレゼントを渡した。鈴はすぐに一夏からプレゼントされたリボンを付けて照れている。

ケーキを食べながらおしゃべりして、いい時間になると弾の時とは逆に私と弾が早めに帰ることにした。一夏の後ろを通りながら2人に「またね」と言い、人差し指を唇に持っていき鈴に、キスしなさいよ。の合図を送った。

３学期の終業式も終わり、４月の始業式まで毎日訓練の日々がやってきた。終業式の翌日、日本支部の地下アリーナへ着替えて向かおうとすると千冬さんが更衣室の前で待っていた。「付いて来い」と言う千冬さんの後を追うと誰もいない整備室の一角に大

きな鉄製の箱が置いてあった。その箱へ近づくと箱が開き始め、中にはＩＳが置かれていた。
「待たせたな。これが栗原の専用機【アマテラス】だ」
　えっ!?と思いつつも専用機となるＩＳに近づき手を触れた。初めてＩＳに触った時よりも多くの情報が頭の中に流れてきた。
「すぐにフォーマットとフィッティングを済ませたいのだか・・・まぁ先に乗り込んでてくれ」
　と言われアマテラスに乗り込んだ。すると
「すまんすまん、トイレに行ったら迷ってしまったわい」
　と白衣を着たおじいちゃんが入ってきた。私が「えっと・・・」と話かけようと
「おお、すまん。わしは伊勢技研の製作主任の米林じゃ。よろしくな」
「栗原美樹です。よろしくお願いします」
「では早速フォーマットとフィッティングを終わらせようかの」
　フォーマットとフィッティング中に武装の説明をされた。
　アマテラスは第３世代機を目標に作られている第２．５世代機である。今は今はスラスターのおかげで機動性はあるが、それ以外はラファールリヴァイヴとあまり変わらないそうだ。スラスターを含め、後々アップデートしていく予定の試作機である。

武装は草薙の剣で雪片と同じく、ＳＥを吸収して雪片のように相手のＳＥごと切ることが可能である。ただ、雪片と違い常時ＳＥを利用するのではなく、任意で込めて使用できるそうだ。

あとソードブレイカーを脇差として拡張領域にしまってある。

そして遠距離射撃装備として撃鉄もあるそうだ。

次に左腕に付けられた盾、八咫鏡の盾（やたのかがみのたて）がある。この盾はＳＥを吸収させることによって大きさが変わり、ミサイルなどの攻撃を大幅に軽減されることができるらしい。

最後に胸部装甲に付けられている八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）にはＳＥを余分に注入させることが出来、草薙の剣と八咫鏡の盾に使用されるＳＥもここから使われるらしい。

聞き終わった私は「これがチートって言うんだろうな～」と思っていた。しかしこの草薙の剣と八咫鏡の盾は本来は千冬さんの専用機、暮桜に装着するはずだったが雪片ができたことにより、日の目を見ることが出来なかった武装だと聞いた。

千冬さんはその武装を私に、と思い伊勢技研に連絡したようだが、伊勢技研の人がノリで言った「じゃぁその子の専用機作っちゃう？」の一言で技術開発の人たちに火がついたらしい。とは言えたった５ヶ月程で作るとは・・・

そして試運転を行うこととなり、アマテラスを待機状態にしてアリーナへ向かった。そして8割ほどの動きで千冬さんと模擬戦を行い、試運転を終えた。8割の動きで打鉄の動きと似ていた上に左右への移動性能もアップしていたので、ますます私好みの性能になった。そして月に1度メンテナンスとデータ収集の為に、伊勢に行くことになった。

米林さんが伊勢技研へ帰ると言うことで見送りに出た。その際

「【ツクヨミ】と【スサノオ】、どちらが遠距離だと思う?」

と聞かれたので

「ツクヨミが遠距離だと思います」

「ほう。それは何故かね?」

「ツクヨミは夜を統べる神、つまり太陽神のアマテラスと対なので遠距離かなと。あとツクヨミ=月読、つまり月です。月は三日月として見ると弓っぽいので遠距離かな~と思いまして・・・」

「わっはっは!三日月で弓か、若い感性もなかなかじゃの~」

と言いながら日本支部から出て行った。賑やかな人だった。アリーナへ向かっていると千冬さんが

「米林さんの言う通り、若い感性もなかなかだな」
　と言われ、私は
「あはは、あれもこじ付けです」
「も？」
「私的に本来、近距離はアマテラスではなく、八岐大蛇を倒したスサノオかな～と。そして中距離と遠距離はアマテラスとツクヨミが、どちらも出来るって印象です」
「確かに近距離はスサノオだな。なら何故名をスサノオにしなかったんだろう？」
「まぁスサノオもツクヨミも男神様と言われてるのでアマテラスにしたのではないかな、と思います」
「なるほどな。さて、では訓練を始めるか」

　機体の運動性能も良くなったとは言え、まだまだ千冬さんには敵わず、私はいつも通り地に伏せられていた。

第２０話　番外編

初の代表候補生のお仕事

８月某日、私は朝から都内にある大手写真スタジオに来ていた。前日に橘さんから「明日なんだけど急に大事な仕事入ったから訓練はお休みね、朝７時に家まで迎えに行くね～」と言われ、現在に至る。なんでも懇意にしているスポンサーさんからの要望だったみたい。スタジオに着くやいなや私は楽屋に連れて行かれ、メイクと髪をセットされて撮影所へと連れて行かれた。そして訳がわからないまま、私はスタイリストさんに渡された衣装を着て撮影に臨んだ。

お昼になり差し入れのお弁当を食べていると、かんちゃんが入ってきてお互いに驚いたよ。話を聞いていると、どうやらかんちゃんも同じように連れてこられたらしい。そう言えば代表候補生のお仕事にモデルの仕事もあったのを思い出し、そういうことなのかな、と２人で話していた。

午後からの撮影でかんちゃんと２ショットを撮っていく。私がかんちゃんを後ろから抱きしめたり、お互い背中合わせになったりと様々なポーズで撮影が進められていった。

何故か途中から、私は男装して撮影された。男装はいいんだけど、私がタキシードなのに、かんちゃんはウェディングドレスを着ての撮影はショックだった。私も着たかったな。その後も私は男装のまま撮影は続いた。

そして、撮影が終わり着替えようとしているとスポンサーさんで今回の責任者が来たらしい。名刺を受け取ると、坂崎さんと言い、どうやら女性向けのファッション誌の編集長さんのようだ。お礼と言う事で今着てる服や今日使用したバックや服の何着かを頂いた。

撮影の帰りにかんちゃんと喫茶店に寄り、お互いの訓練の様子や最近の出来事に花を咲かせていた。この店に入る前もそうだったけど、妙に視線が気になってきた。かんちゃんに「なんか視線気にならない？」と聞くと「その格好のせいじゃない？男装のまだよ」と言われ、私は着替えてなかったことに気づいた。鏡を見たときは、まだ女の子っぽさが残ってると思ったけど、かんちゃんに

「中性的だけどカッコいい」

そう言われると悪戯心が出るものだよね。私のケーキを一口分取って

「ほら、かんざし。あ～ん♪」

すると周りの女性客は「「キャーーー」」と盛り上がってくれた。

ふふふ、満足した♪

弾の誕生日

１１月１１日はポッキーの日だが、私のメインは弾の誕生日であった。何日も前に私はインターネットで弾に似合いそうな、ちょっと高めの財布を注文しておいた。やっぱり普段から使える物を贈って、いつも使って欲しいもんね！

鈴と一夏は日曜日にレゾナンスへプレゼントを買いに行くみたい。私は２人に買った物を伝えて被らないようにしてもらった。

誕生日当日、放課後に弾の部屋に集まりパーティが開かれた。鈴と一夏がプレゼントを渡し、最後に私のプレゼントを渡した。いつか買おうと狙ってた財布だったらしく、とても喜んでくれた。ケーキもあったが、夕食が食べられなくなると困るのでコンビニにある小さめのケーキで代用した。

１７時半になり、鈴と一夏は気を利かせてなのか先に帰ってしまった。１０分ほど話しをしてると弾に「もう一個プレゼントが欲しい」と言われ、ポッキーを咥えさせられ、２人で食べながらお互いの唇が触れた。

元旦の初日の出

元旦の朝も早い６時、私と弾は篠ノ之神社に来ていた。ただし鈴と一夏はいない。正

確には２人の後を付けている状態である。せっかくクリスマスに付き合い始めて最初のイベントである初詣に何故４人で過ごさねばならないのか。

クリスマスの翌日、弾に一夏に初詣に誘われても断るように言ってあった。そして私は大晦日の午前中に鈴に、一夏との待ち合わせ場所と時間を確認して今に至っている。

鈴と一夏が来る前に参拝を終わらせ、２人が来るのを待っている。２人はまず、神社に入る前に服装を整えて一礼をして鳥居をくぐって行った。次に手水舎にて手と口を清めて参道の端を歩いていく。拝殿ではお賽銭を丁寧に入れ、鈴を鳴らして、二礼二拍手一礼をして参列から外れていった。私は弾に

「ねぇ、２人がやってたのが正しい参拝の作法なの？」

「ああ、一夏はここで剣道やってたみたいだし、そういう作法も教えられたらしい」

おっふ・・・　今まで色々間違ってた。

参拝を終えた２人は出店で買った焼きそばやベビーカステラなどを分け合い頬張っていた。

「なんだか２人を見てると兄妹って感じがするよね・・・」

と言う私の言葉に弾も頷いている。そうこうしているうちに２人は少し奥の方の林へと進んで行った。私たちも追って行くと２人が林に入った所が少し開けており、奥へと進んで行く。弾たちは毎年この場所に来てるらしく「ここは夏の花火を見るのに絶好

の場所」だと教えてくれた。しばらく鈴と一夏は雑談している時に空が明るくなった。２人で初日の出を見てる姿を見ると、やっぱり良いカップルだなと思わされた。私たちは戻ろうとしたところ、ふと一夏の手が鈴の頬に触れて一夏の顔が鈴に近づいていくのが見えた。私は不意に携帯電話を取り出してカメラを起動した。そして音がならないように注意しながら２人を撮影して、見つからないように屋台へと向かって行った。

後日、プリントした写真を鈴に見せると「何でこんなの撮ってるのよ!」と言われたが、「じゃぁいらない?」と言うと「・・・いる／／／」と赤面する鈴に渡した。

第２１話

　専用機をもらったことにより、私の生活に変化があった。まず学校に専用機をもらったと言うことで待機状態の左腕のブレスレットの許可を得なければならなかった。これに関してはすぐに許可が降りた。２年生になってすぐに新しいクラスメイトに見つかり、専用機だと説明するとアイドル的な扱いとなり、サインまで強請られることとなった。

　他にも後輩の女子に告白までされたり、断ると泣かれてしまい、慰める為に頭を撫でると「ではお姉様と呼ばれて下さい」と言われ渋々ＯＫを出すと、ほとんどの１年生の女子に「お姉様」と呼ばれるようになった。それに悪ノリした同級生や先輩にも「お姉様」と呼ばれたりすることもある。

　そんな生活が続いて精神的に疲れた私は、毎日のように弾の家で弾に後ろから抱かれながら疲れを癒している。弾の家に入り浸っているからか最近は蘭ちゃんとも仲良くなった。本当はもっと早く仲良くなりたかったが、弾と一緒がいいんじゃないかと気を使ってくれてたようでタイミングが合わなかったようだ。蘭ちゃんは有名私立の聖マリアンヌ女学園中等部に進学したらしく、蘭ちゃんにも愚痴ると

「私の学校でも凄い人気の先輩がいますけど、やっぱり大変なんですね」
と慰めてくれた。が、その後とんでもない爆弾を投げつけられた。
「あ、そういえば美樹さんも私の学校でも人気ありますよ。以前モデルされてた雑誌を読んだ先輩方が会いたがってましたからね。お兄もそんな人と付き合えるなんてラッキーだよね」
えええええ！なんで行ったことすらない学校で!?と余計に疲れる羽目になってしまった。
逆に変わってないことと言えば、親から応援と、私たち４人がまた同じクラスだったことくらいだろう。後者に関して、実は１年生の進路相談の時に、裏で先生に「４人が同じクラスじゃないと・・・」とお願いすると、苦笑いした先生は「頑張ってみる」と了承してくれた。

訓練の方はアマテラスに乗るようになってから、順調とは言えなくなった。打鉄時の葵に慣れてしまったせいで、相手との間合いが掴めずにいる。そして、盾の存在を忘れてたりと、散々な結果で初日を終えた。
翌日からは盾のことは一旦忘れて間合いを覚え直すために、いつも通り剣での訓練が始まった。４月はほぼ千冬さんとの訓練だったが、５月は何度か吉田香保里さんたちと

も訓練させていただいたりしていた。６月に入りなんとか距離を掴めるようになってきた。ようやく草薙の剣に慣れた頃、訓練施設が移動になった。移動理由は盾の訓練をするのにピッタリの人がいるらしい。

その翌週からその人がいる訓練所へと向かった。到着すると、

「はじめまして、栗原さんですね。私は山田真耶です。よろしくお願いします」

今年あったモンドグロッソの射撃部門に出場した山田真耶さんだった。

私は挨拶をして、今日からの訓練内容を聞いた。それは千冬さんとの手合わせ中に真耶さんが３６０。から銃を乱射されるので、盾を使い、上手く躱すなり避けるなりすることだった。この訓練でわかったことだが、千冬さんと真耶さんはペアでタッグを組むことが多く、お互いのクセをよく熟知しているらしい。

まぁこの訓練は勝つことよりもマルチタスクを強化することに重点を置いているから、千冬さんも多少手加減をしてくれている。しかし私が手を抜くと四方八方からの銃弾と千冬さんからの痛いお仕置きが待っているので絶対に手は抜けない。

７月の後半になって夏休みに入っても訓練の毎日だった。そして、この日から地獄が始まった。千冬さんも真耶さんも本気になって攻めてくるのでコンマ１秒すら気が抜けない。気を抜いた途端に剣での斬撃、もしくは銃弾の嵐だから・・・。ちなみに、その時の真耶さんは「あぁ、快感♡」と、とても良い笑顔でした。

第２２話

　地獄の訓練が３連休となった８月４日の朝早くに、いつものメンバーで一夏の家に集まっていた。翌日が私の誕生日だけど、当日は弾と居たいので今日になった。そして今日は、これから新しく出来た市民プールへと向かうための待ち合わせであった。今月の７日まではプレオープンと言うことで優待券を持っている人しか入れないが、私は７月に橘さんから優待券をもらったので４人で行くことにしたのだ。
　プールの入場口に着いて券を渡すと係の人から「オープンしたてでスタッフも新人ばかりなのでミスも多いかもしれませんが～」と説明を受けた。まぁ確かに研修をしたとはいえ、いきなり大人数の対応は難しいだろうからプレオープンという名の練習と言う事か、と思い「大丈夫ですよ～」と伝えて中に入った。
　更衣室がある建物へ向かうと２階建になっており、１階が男性用で２階が女性用となっていた。弾たちと待ち合わせ場所を決めて、鈴と更衣室へ向かい中に入るとかなりの広さだった。２人とも着替え終えると待ち合わせ場所である場内マップの前へ向かうと、弾たちはすでに着替え終えていた。
「おまたせ～」

「俺たちも今来たところだよ。ってか美樹、このリストバンドは？」
「こういう所で専用機を外せないし、ブレスレットが当たって怪我させるかもしれないしその予防ね」
「ああ、なるほど。さて、どこから行く？」
弾の問いに
「ね～ね～、このゴムボートで一周してみない？」
と鈴が答えた。私もそれに賛成して、ゴムボート乗り場へ向かった。
ゴムボートには一夏と鈴、私と弾で乗り途中までレースをして楽しんだ。１０分ほどで一周し終え、他のプールへと向かった。午後になり、お昼ご飯を食べるために更衣室から財布を取ってきてフードコートでご飯を済ませた。
午前中は４人で行動していたが、午後から２人２組で行動することにした。私と弾は、まずスライダーに行くことにした。ここのスライダーは５コースあるらしく、全コース制覇のため何度も並んでいた。最初は普通だったが２回目から係のお姉さんは私と弾を妙にくっつけたがっていて、弾の足の間に座る私を後ろからギュッと抱きしめるように言い、赤くなった私たちで楽しんでいるようだった。
スライダーを５コース制覇私たちだったが、弾の調子が悪くなったので少し休憩することにした。フードコートに戻り、恐らく酔いだろうとお茶を飲みながら弾の背中をさ

すっている。
「何で美樹は大丈夫なんだよ～」
　と弾は言うが私はＩＳに乗ってるので酔うことは少ない。
「ハイパーセンサーで３６０。見渡しながら上下左右に移動するから酔っている暇がないからかな」
「なるほどな～、そりゃ鍛えられるわけか」

「まぁスライダー系が弾の弱点ってことは浮気したらスライダーやジェットコースターの刑ってことかな（笑）」
「あはは、笑えね～・・・」
「ふふ、冗談よ。信じてるからね」
「わかってるって。俺にとっては美樹だけだよ」
「／／／・・・。　も、もう行くよ」
　そう言ってフードコートを出た私と弾は波の出るプールに行き、サーフィン体験など色々なプールで楽しんだ。
　１６時になり、そろそろ帰宅の時間になった。更衣室でシャワーを浴びていると鈴も来たようだ。２人とも着替えを終えて出入り口付近で待っている弾と一夏に合流し、家

へと帰った。

翌日の誕生日当日、私はある荷物を持って弾の家へ向かった。弾の家へ到着すると弾を自室で待たせて、蘭ちゃんの部屋で眼鏡をかけ、ブラウス、タイトスカート、ストッキングに着替えて弾の部屋へ入った。私を見た弾は驚きつつ

「なんて格好してんだ?」

と聞いてきたので

「じゃ～ん!家庭教師のコスプレで～す」

と眼鏡をクイッとさせながら笑顔で答えた。そして休みの残り2日を夏休みの宿題に費やしたのであった・・・。

第２３話

３連休が終わり、また今日から地獄の訓練が始まった。千冬さんから
「充分リフレッシュしてきたようだな。また今日からビシバシいくぞ！」
うへぇ～・・・
「が、頑張ります・・・」
その後、毎日千冬さんの斬撃か、真耶さんの弾丸の雨あられ。訓練後は毎日大の字に寝ることとなった。

２週間ほど経つと漸く体が慣れてきた。けど、勝てるとは言っていない。まぁ最初の頃と比べると良くはなってきた。相変わらずボコボコにやられてるけど・・・。
そんな時に、またもやモデルの仕事が入った。前回のファッション誌の特集のようだ。前回と同じスタジオに入ると、既にかんちゃんがいた。
「かんちゃん、久しぶり～♪」
「美樹も、久しぶりだね」
そしてファッション誌の編集長である坂崎さんの姿も見えたので挨拶に行った。

「坂崎さん、お久しぶりです。今回もよろしくお願いします」
「あら美樹さん。私のこと覚えてくれたのね。こちらこそよろしくね」
　私たちは坂崎さんに挨拶を済ませて、メイクさんやスタイリストさんに連れられて準備を済ませて撮影が始まった。今回も秋にかけての洋服屋バックなどのアイテムを着て撮影している。
　午後からはワンボックスカーに衣装を詰め込み、屋外での撮影をすることになり公園などで撮影を行った。ある程度撮り終えたところで、またスタジオでの撮影になった。そして、ついにきてしまった・・・。そう、男装だ。坂崎さんから
「前回の雑誌で美樹ちゃんの男装がものすごく反響が良かったから、またお願いね～♪」
　と、物凄く良い顔で言われ、反論する間も無く衣装チェンジとなった。何気にかんちゃんも良い笑顔だった・・・。
　今回タキシードはないそうだが、男装メインで載るんだろうな～と複雑な気持ちになった。
　全ての撮影が終わり、また何着か衣装をもらえることになった時にかんちゃんが
「美樹が着た男性用の衣装を弾君にあげたりしないの？」
　と聞いた。
「一応考えたことあるけど、私のサイズだから弾には小さいから着れないから無駄に

なっちゃうよ」

と言うと、坂崎さんが

「Ｌサイズもあるわよ？」

と何着か持ってきてくれた。

「それより弾君って誰よ～。美樹さんの彼氏かな？」

と、からかってきた。後ろで坂崎さんとかんちゃんが弾のことで盛り上がってるなか、Ｌサイズがあるとのことなので、弾用と蘭ちゃん用に数着ずつ頂くことにした。

帰りにかんちゃんと去年と同じ喫茶店に入った。今回は男装してないから特に注目されることはなかったが、以前ファッション誌に載ったことで候補生として人気が出てきたのか見られてる感じやヒソヒソ声が聞こえて来る。そう言う声を無視して訓練所の様子や学校での話題でおしゃべりしながらひと時を過ごした。その中でも訓練所の様子が変わったようでビックリした。

私を含めて７人だった先輩候補生が２人引退し、後輩１人が入ってきたらしい。先輩方は千冬さんの１年後に候補生になった先輩で千冬さんの引退に考えさせられることがあってか、後輩の為に教える側に回るみたいだ。１人はＩＳ学園へ、もう１人はそのまま訓練所に残り育成係としてやっていくそうだ。

そして新しく入ってきた後輩については内緒にされた。かんちゃんの

「私から聞くより見た方がいいよ」
と言われ、それもそうかと思い、詳しく聞くことはなかった。
３０分ほどたって解散して弾の家へと向かった。呼び鈴を鳴らすと蘭ちゃんが出てきた。そして蘭ちゃんに
「今日また雑誌の撮影があったんだけど、蘭ちゃんに似合うと思ってコレ頂いたんだけど、貰ってくれる?」
「ええ!私のためにもらってくれたんですか?美樹さんありがとう!」
と抱きついてきた。
「あ、あとついでに弾のもあるから渡しておいてくれるかな?」
「お兄のもあるんですか?ありがとうございます」
「じゃぁ私は帰るね。蘭ちゃんまたね」
その後自宅に帰り、明日の準備や宿題などを終わらせた。

因みに弾の家では簡易ながら、蘭ちゃんのファッションショーが行われていたのであった。

第２４話

１０月に入って千冬さんとの訓練は終わりを迎えた。あれから１ｖｓ２だったり千冬さんや真耶さんとの個別の対戦だったり、真耶さんから射撃の訓練をみっちり受けたりしていた。

もうちょっと訓練を受けたかったが、ブリュンヒルデの千冬さんや現国家代表の吉田香保里さん、真耶さんから１年も指導を受けることができたのだからこれ以上我儘は言えない。

最後の訓練が終わった日、千冬さんと真耶さんに食事に誘われた。その席で千冬さんは１０月から３月までドイツに行き、ドイツ軍ＩＳ部隊の教導に行くと聞かされた。去年のモンドグロッソの時にお世話になったので、そのお礼として教導を持ちかけられ、了承したようだ。真耶さんは１月ずつ日本の各訓練所を周り後輩たちを指導するらしい。私もまた見て欲しいと伝えると、自主練用のメニューを貰った。

そして１０月になって初めての訓練日、私は少し早めに以前いた訓練所へと向かった。訓練所に入るとまず所長室へと向かいノックをして、促されるまま所長室へと入った。

「所長、ただいま戻りました」
「おかえりなさい、栗原さん。彼女の訓練はどうでしたか？」
「何度も死ぬかと思いました・・・」
「彼女の教導は厳しいと言われてましたからね。それを1年も続けれたのですから充分に鍛えられてるはずですよ。これからも精進して下さいね」
「はい！」
　その後、所長と少し話をして更衣室へと向かった。そこで新しい候補生の子に自己紹介されたのだが・・・
「8月に代表候補生になりました五反田蘭です。よろしくお願いします。美樹先輩♪」
「えええーーっ!!　弾から何も聞いてないよ」
「お兄には内緒にしてもらっていたので♪」
　そんなこんなで訓練が始まった。
　開始後すぐに専用機持ちの先輩から模擬戦を申し込まれ、了承した。
　模擬戦ということで訓練は一時中断し、アリーナには私と先輩だけになった。
　１０分後、私のシールドエネルギーが6割を切ったところで先輩のエネルギーが０になり勝負がついた。

「やれやれ、負けちゃったか。本当に強くなったわね。いったいどんな訓練をしてたの？」

そう聞かれ、訓練内容を思い出してみると、ずっと基礎や模擬戦、模擬戦の映像を見ながらダメ出しされ、即修正訓練だった。それを伝えると

「そりゃ強くなるわけね」

その後、見学してた人たちがアリーナに戻ってきて訓練を再開された。

皆、訓練は自主練や先輩に言われた訓練をしている。私も千冬さんに貰ったメニューを基に訓練を始めた。

第２５話

元の訓練所に戻って１ヶ月程たった。あれから模擬戦や千冬さんのメニューをこなしながら訓練を続けている。そろそろ弾の誕生日だしプレゼントの用意をしたいけど、今年は何をプレゼントしようか迷っていた。去年は財布だったから時計にしようかとネットを見てみると、ちょっと高いけど良さそうな腕時計を見つけた。カシオのクロノグラフソーラー電波時計ってタイプだけど、値段も去年と同じくらいだしこれに決めた。

今年は誕生日の前々日に用事がないのでネットショッピングではなく、鈴や一夏とレゾナンスで買うことにした。

買い物当日の会話の内容は何を買うかが主だった話題だったが、蘭ちゃんが候補生になったことを聞こうとした時に、ふと蘭ちゃんの誕生日が気になった。２人に聞くと１月１４日らしく、当月にお祝いしようと決めた。

１１月１０日に４人でお祝いをして、その翌日の学校終わりに弾と２人きりでレゾナンスに向かいゲームセンターやカラオケデートを楽しんだ。

３月に入り千冬さんからのメニューも着々とこなしていく中で、私の周りに変化が起きてきた。刀奈さんが日本の候補生を辞めてロシアの候補生になったことだ。更織家は旧家でかなり特殊な家系らしく日本の候補生では自由に動けないらしく、自由国籍権を取得してロシアの候補生になったらしい。（日本でも多少の便宜は図ってもらえそうな気もするけど・・・）。そして、当主である証として楯無の名を襲名したようだ。そのため、刀奈という名で呼ばないように言われた。こうして楯無さんが辞めたかとにより、訓練所のメンバーは５名＋教導官１名となった。

そして鈴の両親が離婚することとなり、親権が母親にあることから中国へ帰ることとなった。その日から思い出作りのために訓練をお休みしてなるべく４人で色々な場所に遊びに行った。たまに鈴と一夏の２人だけで出かけたこともあったが、妙に鈴の肌の調子が良さそうだったり余所余所しい２人を見て思うところはあるが、これからの２人のことを思うと何も言えなかった。

鈴の帰国の日、空港まで見送りに行った私たちは泣きながら鈴にお別れの挨拶をした。その時、私は鈴に

「鈴、中国に戻ったらＩＳの適性検査を受けた方がいいよ。適性はあるのは分かったけど、ランクまでは分からなかったし。もしかすると候補生になれるかもよ」

「まぁ美樹がそう言うなら検査するけど、候補生になったら中国から出にくくなるんで

しよ？」
「うん。だけど、ＩＳ学園に通うなら話は変わってくるよ？それに就職もＩＳ学園なら休みの日に一夏の近くにいれるよね」
「！？　さすが美樹！　よーし！やってやるんだから！！」
やっぱり元気な鈴が一番だね♪

第２６話

鈴の転校から一夏は大分落ち込んでいたが、私の携帯に鈴からメールが届いた。一夏は千冬さんに無理を言って買ってもらった携帯で鈴とメールができるようになったので多少元気が出てきたようだ。嬉しいのは分かるけど、長々と使ってると没収されるぞ・・・。

鈴からのメールには、無事に代表候補生になれたようで来年ＩＳ学園に通えるように頑張っているみたいなのでホッとした。

新学期が始まり、また３人とも同じクラスになった。ある日一夏が落ち込みながら職員室から帰ってきた。なんでも夏休みに中国旅行をしようとして、旅費のためにアルバイトの許可を貰おうとしてたみたいだ。色々と聞きたいことが出来たので、放課後一夏の家に集合して話を聞くことにした。

「夏休みに中国に行きたいって気持ちは分かるけど、千冬さんに許可はもらったの？」

「いや、まただけど」

「まず、そこからだと思うよ？それに１年の時のドイツで何があったか忘れてないよね？」

「・・・・・」
「「・・・・・・」」
「諦めるよね？」
「はい・・・」
　私と弾は呆れていたが、鈴に会いたいのは私も同じだ。
「一番いいのは鈴に来てもらうことかな。代表候補生ならお給料もあるし旅費くらいなら出せると思うけど、問題は候補生の鈴が「他国に行けるか」なのよね」
「ん？どういうことだ？」
「自由国籍権とか亡命の関係で許可が必要だからね。まぁただの候補生なら許可は出やすいけど、専用機を持つと許可は出ないと思うな。ＩＳコア１つで数十億の世界だし、技術流出の恐れもあるしね」
「えぇ！ＩＳのコアってそんなに高いのかよ！」
「そろそろ一般常識になるから、その辺も勉強しといた方がいいよ。って言うか幼馴染みのお姉さんの発明のことなんだから、もうちょっと興味を持った方が・・・」
　と本日何度目かの呆れ発言だったが、それは置いておいて、鈴に夏休みに日本に来れるかメールをしてお開きになった。
　後日、鈴から「訓練で忙しいからいけないのよ。ゴメンね」とメールが来て落胆した

一夏がいた。

夏休みの半ばに千冬さんからもらった訓練メニューを全て終えた。その事を千冬さんに伝えると8月中に1日だけ時間を作ってくれることになった。

訓練当日、まずは千冬さんが作ったメニューの完成度チェックから始まり、いつも通りダメだし&修正を行った。私が修正しているときは指導係の先輩や他の子の指導も行ってくれて皆喜んでいた。余った時間で私たちとの模擬戦をして、それぞれ修正できる動きなどをリスト化し終了となった。

千冬さんが今日は自宅に戻るらしく、訓練が終わったあと千冬さんと一緒に帰った。その時私は以前から気になったことを聞いた。

「千冬さん、いま仕事は何されてるんですか?」

「ん? 知らなかったか? 今はIS学園で教師をしている」

「ええー!! そうだったんですか・・。確か全寮制でしたよね? だから家に帰れなかったんですか」

「ああ、教師も寮暮らしだからな。それにしても今日は久しぶりに動いたからビールが旨そうだ」

第２７話

　１１月になり受験シーズン真っ只中の私たち。８月から基本的に平日は一夏の家で勉強会を行っている。弾と一夏の志望校は藍越学園で、一夏はＡ判定だったが弾はＢ判定だった。Ｂ判定でも悪くはないが、万全を期す為にもＡ判定にのせたいところだ。なので私と一夏で弾の勉強を見ることにしている。勉強会を終え帰宅中に公園に寄った。

「１１日誕生日だよね。プレゼントは何が良い？」

「特にない・・・。あ、またコスプレしてほしい」

「えっ・・・？」

「ダメならいいんだ・・・」

「まぁいいけど・・・。一夏の家で？」

「あぁ、そうか。一夏に美樹のコスプレ見せたくねぇしな」

「ふふ。なら藍越に受かったら旅行にでも行く？卒業旅行ってことで。と言ってもネズミーランドだけど」

「おお！ちなみにアッチの方は？・・・」

「受かったらね／／／」

「うおおおおお!!絶対受かってやるううう」
「はいはい。それまではこれで我慢してね」
とお互いの唇を触れ合わせたのであった。

冬休みになりＩＳの訓練に精を出して取り組んでいる。そんな時、かんちゃんに倉持技研から専用機の話が来たようだ。倉持技研が今の打鉄をベースにして第３世代機を作るためのパイロットとしてかんちゃんが選ばれたみたい。
「かんちゃん、やったね！　おめでとう♪」
「うん！ありがとう」
「それで、どんな機体になるの？」
「それはこれから決めていくみたい」
「そっかー。かんちゃんには『ツクヨミ』に乗って欲しかったんだけどな～。でも伊勢技研より先に倉持技研がかんちゃんをスカウトしてるんだから仕方ないよね」
『ツクヨミ』とは伊勢技研で作られた私の『アマテラス』の兄弟機で、中～遠距離型の機体に仕上げようとしているらしい。
「そうだね。美樹より大分遅れての専用機だから頑張らないと！」
「私の場合は千冬さんのお陰だからね。千冬さんの推薦がなかったら、まだもらえてな

かったかもだし」
「そんなことないよ。美樹頑張ってるもん」
「ありがとう。専用機完成したら模擬戦しようね」
「うん！負けないからね！」

冬休みが明けて3学期が始まった週の土曜、私は受験のためＩＳ学園に来ていた。正直なんでこんな早い時期に受験なのか疑問に思っていたので以前橘さんに聞いたところ、日本以外の受験者は代表候補生が多いらしく、その候補生の専用機を入学式に待ち合うように制作や調整の為に受験日を早目に設定したようだ。納得した。

最初は筆記試験ということで指定の教室に向かった。教室には2人分の机しか無く疑問に思っていると、後ろから
「筆記試験に関しては各国で行われるからな。そしてこの教室は代表候補生用の教室だ」
と言われた。えっ！と思って振り返ると千冬さんが立っていた。
「候補生は筆記試験が終わり次第すぐに実技試験に入るからその為だ」
「なるほど」
しばらくするとかんちゃんも来たようだ。そして筆記試験が始まった。筆記は数学

と理科、ＩＳ理論の３教科だ。苦手な教科でも無いのでスムーズに終えることができた。

そして午後からの実技試験では学園の教師との模擬戦と言うことでロッカールームに案内されＩＳスーツへ着替え私は第２アリーナへと向かった。そこで

「来たか。この仕事をしていると身体を動かす機会なんて無いからな。充分楽しませてくれよ?」

と千冬さんが打鉄に乗って待っていた。『勝てる訳ないじゃん!』と思いながらアマテラスを起動させ模擬戦の準備をした。そして『始め!』のアナウンスと共に２人の刃が交差した。

５分後、千冬さんのＳＥが７割を切ったところで私のＳＥが無くなり模擬戦を終えた。

「ここまで楽しめたのはアリーシャ以来だな。今なら吉田にも勝てるかもしれんぞ」

「いえ、まだまだですよ・・・。それより、私は不合格ですか?」

「ん?そんな訳ないだろ。私に勝てなんて言った覚えはないぞ」

「え?じゃぁこの模擬戦は?・・・」

「動きを見るためのものだ。まぁ一般組よりも辛口に採点はするがな」

「な～んだ～」

と緊張が解れた。
「栗原の試験はこれで終わりだ。そう言えば更織姉が終わったら生徒会室に来てほしいと言っていた。地図を渡すから行ってこい」
「ありがとうございます」
と千冬さんから地図をもらうと制服に着替えて生徒会室へと向かった。
生徒会室に着くとノックをして「どうぞ～」と言われたので入ると、楯無さんと虚さんに出迎えられた。
「お久しぶりです。楯無さん、虚さん」
「美樹ちゃんも久しぶり～♪」
「お久しぶりです。美樹さん」
虚さんからソファーに座るように促され、楯無さんも向かいに座った。
「実は美樹ちゃんに生徒会に入ってもらいたいのよ」
「え？まだ合否も決まってないのにですか？」
「代表候補生を落とすって国のメンツに関わることだから滅多にないわよ」
「ああ、なるほど・・・」
「という訳で入ってくれるかな？」
「え、ええ。それは構いませんが、１年生でもいいんですか？」

「構わないわよ。任命権は生徒会長にあるの。つまり私ね」
「え！今1年生の楯無さんが生徒会長なんですか？」
「ええ、そうよ。ＩＳ学園の生徒会長は『学園最強であれ』って言われてるからね。実力で奪っちゃった♪」
そう言いながら扇子を開き、扇子には『学園最強』の文字が書かれていた。
「じゃぁそういうことで、新学期からお願いね。栗原副会長♪」
何というかいきなり副会長と言うのもどうかと思ったが、言われるがまま受け入れることにした。
因みに虚さんから出されたケーキと紅茶は今まで食べたことのないくらい美味しかった。

第２８話

１月に受けたＩＳ学園への入試も合格した。あとは弾と一夏が２月にある藍越学園の入試に受かるだけだ。私はＩＳ学園に通うのだが、記念として藍越学園も受けようとしている。私と一夏は余裕だろうけど、弾はまだＢ判定なので後の公立のこともあるし、勉強は続けていた。

２月中旬、ついに藍越学園の受験日がきた。が、藍越学園の試験の為に４駅離れた、とある多目的ホールへ向かった。何故かと言うと去年起きたカンニング事件のせいで各学校が２日前に入試会場を通知することになったからだ。

そして多目的ホールに到着し、中に入り私たちのテスト部屋を探すが、２階へ行くための階段が見当たらない・・・。と言うか、先程から違和感がある。が、それよりも緊張のためかオシッコしたい・・・。私は２人に

「ごめん。トイレ行ってくるね」

「おー。いっトイレ～」

・・・・・・・

聞かなかったことにしよう・・。

ともかくトイレを見つけ、用を足した。

余計な雑念がなくなりスッキリしたことにより、手を洗っている時に違和感の正体に気付いた。そう『受験生がいない』ことに。

私は慌てて2人を探し出したが、弾は近くで見つかったが一夏は階段を探しに行ったらしい。私は弾に

「ねぇ、入試会場ってここで合ってるのかな?さっきから受験生の姿が見えないけど・・・」

「えっ!?　そういえば・・・」

その時

(君!そこで何してるの!?　えっ、まさか・・・)

(えっ!あの・・・　その・・・)

「一夏の声だよな?」

「うん。一夏の声だったね」

私たちは声がした方へ走り出した。すると大きな部屋にＩＳ（打鉄）があり、そのすぐそばに一夏がいた。

私は勘違いをしていた。一夏が打鉄を触ろうとした時に注意されたのだと。そして

受付っぽいお姉さんに謝り一夏を連れて部屋を出ようとした。するとお姉さんが
「ちょっと待って！あなた男よね？なんでＩＳを起動できたの?!」
「えっ!?」
「いやいや、あれに触ったら『キンッ』って金属音みたいなのが鳴って、何か色々頭の中に入ってきただけだって！」
「それを起動したって言うの！」
私とお姉さんのツッコミに一夏はたじろいだ。
ただ、それだけで終われる問題ではないことは確かだ。今まではコアの数が少ない上に女性しか動かせないと言う欠陥のお陰でＩＳはスポーツとして受け入れれていたが、動かした男性を研究し、男性も動かせるようになると、米と書く自称国家警察の国がコアを独占しようとしてもおかしくない。私は千冬さんに連絡しようと携帯を取り出し、コールボタンを押した。
すると、そこへ趣味の悪いケバい化粧をしたおばさん２人が入ってきた。
「見てたわよ。男の癖にＩＳを動かせるなんて生意気よね～。ねぇ宮根部さん？」
「ええ、まったくですね。和田地さん」
名前を聞いて思い出した。この２人は女性権利団体から支持を受けて当選した国会議員だと。そして、おばさん達は私達に

「その男をこちらに渡してもらえるかしら？」
「何のためにですか？」
「ふふ、その男を研究所に送るのよ。研究者達からの莫大な礼金を貰えたらあなた達にも分けてあげるわよ？」
「あり得ませんね。そんな事のために友達を売る気はありません」
「ふふ。後悔しても知らないわよ。　あんた達、行きなさい！」
おばさんの1人がそういうと、厳つい黒服達が5．6人出てきた。おばさんの
「あの3人を殺さない様に痛めつけてやりなさい」
の言葉に私は意を決して専用機、アマテラスを起動させた。
「2人には指一本触れさせない！」
「「なっ！」」
黒服達は動きを止めた。生身でＩＳに立ち向かう程愚かなことはない。
「あの小娘、代表候補生だったとはね。あんた達！あの小娘ははこっちで何とかするから、あんた達は男の方を何とかしな！更織の意地を見せなさい！」
おばさんが黒服達に発破をかけたようだが、それは悪手だろう。
「へぇ～、黒服さん達って更織の人だったんだ。依頼かもしれないけど人身売買のこと、刀奈さん・・じゃなかった。現当主の楯無さんや簪さんに報告させてもらってもいい

のかな?」
「!?」
「楯無さんには以前プライベートビーチに誘ってもらったり、来年ＩＳ学園の生徒会長の楯無から副会長に任命される程度の関係でしかないですが」
　黒服のリーダーっぽい人は一瞬何かを考えるかのように目をつむり
「失礼しました。我々は今回の依頼から手を引きますので、どうか当主様には内密に・・・」
「だったら2人の護衛をしてもらえる?依頼料なら払うから」
「かしこまりました」
　黒服さん達の行動に、おばさん達が苛立ちながら
「もういいわ!咲良、あいつらを痛めつけてやりな!」
　そう言うと、ラファール・リヴァイブを纏った人が出てきた。そして大剣を振りかざしこちらに向かってきた。私は迎え撃つために草薙の剣を構えてると、『ガキンッ』と音がした。
「ほう。私の弟やその友人、そして弟子を痛めつけるのか。許さんぞ!」
　の声と共に、ある女性が持っていた剣を一閃させた。すると咲良と言う女性が纏っていたラファールは量子化され、待機状態へと戻ってしまった。

「「ブ、フリュンヒルデ!?」」
　えっ！何で千冬さんが？・・・
「私をその名前で呼ぶな！」
　おおぅ、一喝で静かになった。と言うかガクブル震えてる。そう言えば
「千冬さん。何故ここに？」
「ん？栗原が電話してきたんだろ？まぁ途中からだったが一夏が危険な感じがしたからな。まぁ栗原がＩＳを起動したから場所がわかったよ。まぁ最初からこの場所にいたがな」
「え？それはどういう・・・」
「それは後で説明するとして。更織、この３人を任せる。あと後ろの２人の護衛料は私に回せ」
「わかりました♪」
　ええーっ！楯無さんもいたの!?
　あ、後ろの護衛さん達がガクブルしてる・・・
「今回のことは一応不問にするけど、ちゃ～んと美樹ちゃんに感謝しなさい！」
「「はい！」」
　あ～よかった！これで一件落着だね。

あれ？何か忘れてるような・・・
「そう言えば一夏、今日入試じゃなかったか？」
えっ・・・
「「ああーーっ!!!」」
「と言うか、ここはＩＳ学園主催のイベント会場だぞ？」
「「へっ?!」」
あぁ、千冬がこの会場にいた理由ってそういう事か。って！
「い～ち～か～（笑）」
「すまん！『あいえつ』と『あいえす』を間違えたみたい・・・。　ほら１文字違いだし・・・」
「はぁ・・・」
「まぁ一夏はＩＳを起動したと言うことで、また狙われるかもしれんからＩＳ学園に通うことになるかもしれんが、五反田は公立に掛けるしかないな」
「「ですよね～」」
「五反田、ウチの愚弟がすまんな」
「いえ！一夏には勉強も見てもらいましたし成績も上がったので親も喜んでくれてますので」

「まぁ私達も確認しなかったからね。一夏だけのせいじゃないから、気にしすぎるのも良くないよ」
「本当にすまん・・・」

その後、男性がＩＳを起動したとニュースなどで話題になり、初の男性ＩＳ操縦者として取り上げられたが、ブリュンヒルデの千冬さんと天災の篠ノ之束さんと言う強力な後ろ盾もありつつも、一夏の周りには沢山の報道陣が詰めかけた。そのため、外出も出来ないまま残りの１月半を家で過ごすことになった。
そして一夏の安全確保のためにＩＳ学園に入学することになり、卒業後の進路も決まってしまった。
一夏が外出出来ないので、代わりに私と弾で買い出しをしている。
「そう言えば鈴もＩＳ学園に通う事になったみたいね。新年度からまた同じ学校に通えるね」
「そうだな。鈴もビックリしてたよ」
「だね。でも弾だけ別の学校か・・・」
「まぁ仕方ないか。たまに遊びにきてくれよ」
「うん♪」